

## (20) キューバ暴風雨災害



### 物資供与の経緯および概要

3月12日夜半から13日夕刻にかけ、キューバ全土は発達した温帯低気圧の影響による暴風雨（最大瞬間風速44m/毎秒）に襲われ、更に首都ハバナを含む西部海岸地域は最大8mの高波に襲われた。その結果首都ハバナなどで死傷者が出たほか全土で多数の家屋が浸水し、送電線、上下水道、食料庫、道路、港湾設備などのインフラ及び農地などにも多大な被害が生じた。また被災者の多くが避難先で長期の耐乏生活を強いられる中、衛生状況の悪化から熱帯性伝染病の蔓延も懸念されている。

我が国としては、キューバ政府からの要請を受け、同国における今世紀最大規模の自然災害となった今次暴風雨、高波により多くの被災者が極めて劣悪な環境での耐乏生活を強いられており、人道的見地から緊急援助を行うこととした。

1	国名	キューバ共和国
2	災害区分	暴風雨
3	災害発生時期	1993年3月
4	災害の規模	死者 5人、負傷者 95人、被災者 約15万人、 家屋損壊 約38千戸、 被害総額 約10億ドル
5	活動区分	<u>援助物資の供与</u> 発電機、医薬品、医療資材
6	供与時期	1993年3月

### 被害状況：

人 的 被 害		物 的 被 害	
死者	5人	家屋全壊	1,484戸
負傷者	95人	家屋損壊	36,401戸
被災者	149,680人	公共施設の損壊	3,248ヶ所
		被害総額	10億ドル

(3月18日現在)

## キューバ暴風雨災害に対する緊急援助の推移

1. 3月22日（月）11時、外務省よりキューバ暴風雨災害に対する緊急援助を検討してほしい旨連絡越した。

### 1) 3月22日現在の被災状況

3月12日深夜に発生した暴風雨（最大風速160km）及び13日夕刻から14日にかけて発生した高波（最大8m）は、キューバ西部のピナル・デル・リオから中央部シエゴ・デ・アピラ、カマグエイニに至る地域を襲い、同地域では家屋流失、道路・橋梁流失など甚大な被害を被った。

### 2) 先方政府要請

キューバ政府は防災委員会を中心に、被災者に対する緊急食料、医薬品、衣類などの救援活動及び災害復興活動を展開している。

3月18日（木）キューバ国外務省及び現地UNDP代表主催の今次災害に関するアジアグループの説明会が開催され、同席上チャメーロ・アジア局長より口頭にて各国への緊急援助要請があった。要請内容は以下のとおり。

- ・緊急援助必要物資：医薬品、粉ミルク、小麦粉、缶詰類、除草剤、肥料、屋根用建築資材、発電機。

特に被災地では医薬品が不足しており、さらに浸水地域の排水については小型発電機の不足により十分に復旧が進んでいないことから、医薬品及び発電機を強く要望している。

### 3) 外務省及びJICAの対応

キューバ政府が緊急援助要請を国際社会に対して行うのは、今回が初めてであるが、我が国としても積極的に支援していくこととし、約10万ドル(1,193万円)相当の物資供与にて対処する方針である。

#### (1) メキシコ備蓄分

- ・発電機(120V/60Hz) 25台

#### (2) UNIPAC調達分

- ・医薬品・医療資材(EMERGENCY HEALTH KIT) 5セット

2. 3月23日(火)16時00分、外務省より下記の緊急援助を実施する旨連絡越した。

1) 外務省及びJICAの対応

(1) 援助物資の供与：概算 11,925,000 円(輸送費含む)

①メキシコ備蓄分

・発電機(120V/60Hz) 25台

②UNIPAC調達分

・医薬品・医療資材(EMERGENCY HEALTH KIT) 5セット

(2) 援助物資輸送日程

①メキシコ備蓄分

3月26日(金) (10:40) (MX-313) (14:05)

メキシコ発 ————— ハバナ着

②UNIPAC調達分

(CU441) (16:40)

3月28日(日)コペンハーゲン発 ————— ハバナ着

3. 緊急援助物資のキューバ政府に対する我が国援助物資の引き渡し状況

1) キューバ政府への引き渡し状況

在「キュー」国日本大使館からの報告によれば、キューバ政府への贈呈式はメキシコ備蓄分到着後の3月26日タラドリッド「キュー」国経済協力国家委員会副委員長(次官)の立会のもとにハバナ空港において実施された。

また、同日レミレス外務大臣代行より25日付書簡を持って、キューバ政府および同国民の名において日本政府に対し感謝の意を表明した。

2) その他の援助国、国際機関などからの援助状況

(1) 3月23日、ペルーより援助物資16トンが到着

(2) 3月24日、国際赤十字が総額27万スイスフランの物資援助を各国赤十字へ呼びかけ

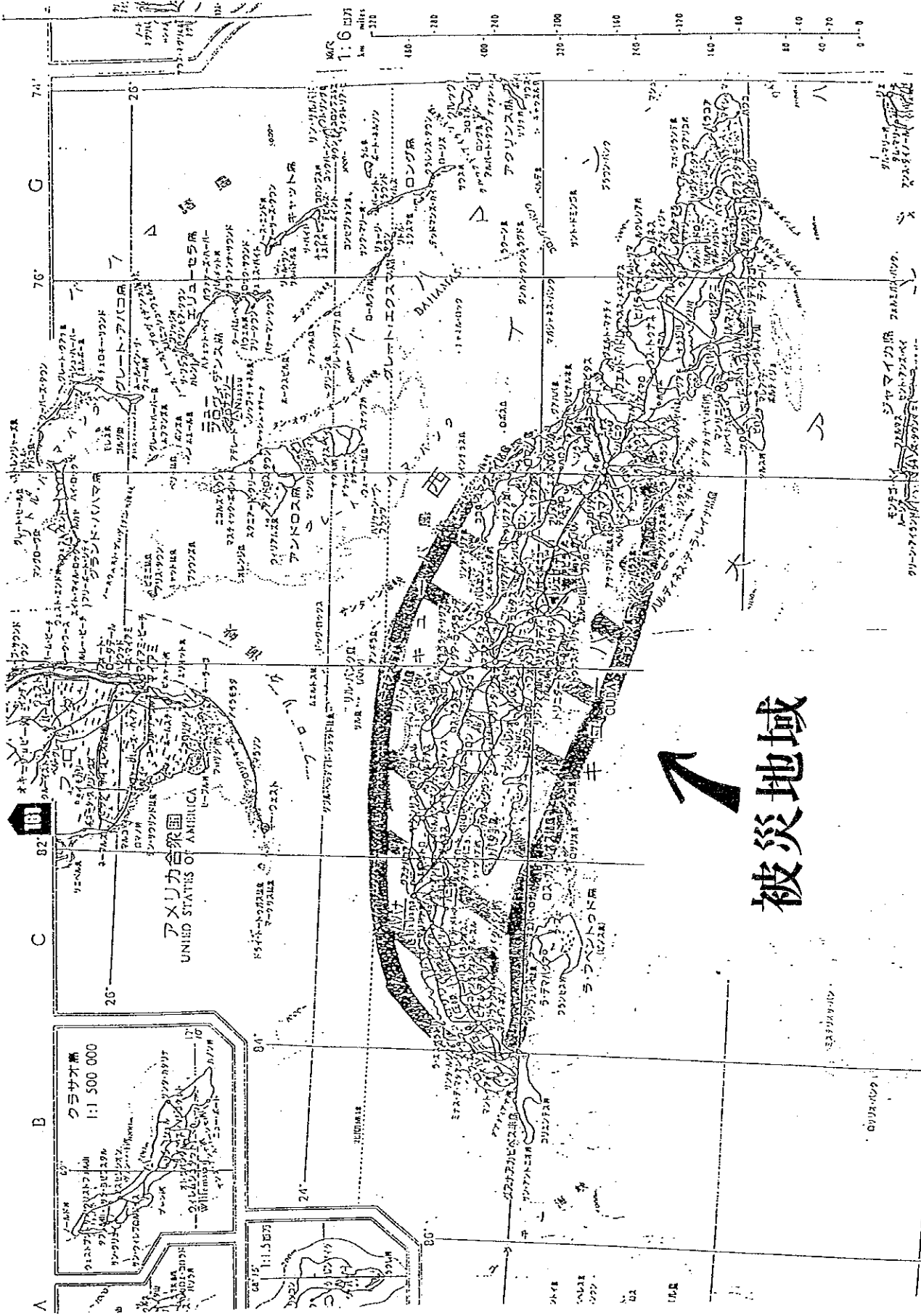
(3) 3月25日、メキシコより援助物資12トン到着。26日にも第2便として18トンが到着予定

(4) 3月25日、UNICEFが10万ドルの緊急援助実施を決定

(5) ドイツを含み欧州各国は、それぞれ本国において援助方針を策定中

各国及び国際機関等からの援助状況

		US\$
・ <u>国連機関及び</u>		
<u>国際機関</u>	WFP	2,315,601
	FAO	250,000
	UNICEF	100,000
	UNDP	50,000
	PAHO	30,000
	DHA-GENEVA	25,000
	COMMISSION OF EUROPIAN COMMUNITIES	
	: 小麦粉(4,392MT) 植物油(800MT)	. . .
・ <u>各国政府</u>	中国	1,000,000
	イタリア	314,465
	スペイン	102,564
	日本	102,008
	ドイツ	61,349
	ヴェトナム	50,000
	ペルー	29,000
	オランダ	27,322
	チリ	10,000
	セント・ルシア	5,000
	アルゼンティン	. . .
	ベリーズ	. . .
	コロンビア	. . .
	ジャマイカ	. . .
	韓国	. . .
	メキシコ	. . .
	ヴェネズエラ	. . .
・ <u>民間援助団体</u>	DIAKONISCHES WEAK DER EKD, GERMANY	家屋修復用救援資金150,000
	CARITAS GERMANY	救援資金、船舶屋根用資材 61,350
	M. S. F.	チーム、医薬品、救援物資 35,000
	ASOCIACION DE AMISTAD SUECIA-CUBA	詳細不明 10,000
	NETHERLANDS CITY OF ROTTERDAM	救援資金 10,000
	WORLD COUNCIL OF CHURCHES	救援資金 10,000
	FONDO JUV. DE AYUDA A LOS NINOS DE CHERNOBYL	衣類他 . . .
	ORDEN DE MALTA	医薬品 . . .
	OXFAM BELGIUM	衣類 . . .
	—赤十字—	
	中国赤十字	救援資金 20,000
	アメリカ赤十字	救援資金 20,000
	スイス赤十字	救援資金 19,867
	スウェーデン赤十字	救援資金 19,231
	カナダ赤十字	救援資金 9,664
	日本赤十字	救援資金 8,547
	ノルウェー赤十字	救援資金 7,194
	イギリス赤十字	救援資金 7,143
	コロンビア赤十字	救援物資 5,000
	リビア赤十字	救援資金 2,000
	ホンデュラス赤十字	救援資金 200



被災地域









## 2. 平成4年度JMTDR/JDR 各種会議及び研修会



## 2. 平成4年度JMTDR/JDR 各種委員会並びに会議開催状況

### ・JMTDR

- ・運営会議 ①平成4年10月30日(金) 14:00 ~ 16:00
  
- ・企画調整委員会 ①平成4年7月1日(水) 14:00 ~ 17:00  
 ② // 10月19日(月) 14:00 ~ 17:00  
 ③ // 11月10日(火) 14:00 ~ 17:00
  
- ・情報部会 ①平成4年10月2日(金) 14:00 ~ 16:30  
 ② // 11月27日(金) 14:30 ~ 17:20  
 ③ // 12月11日(金) 14:30 ~ 17:30  
 ④平成5年1月27日(水) 14:00 ~ 17:00  
 ⑤ // 3月1日(月) 14:00 ~ 17:30
  
- ・研修部会 ①平成4年6月29日(月) 14:00 ~ 15:00  
 ② // 8月17日(月) 14:00 ~ 18:00  
 ③ // 10月15日(木) 15:00 ~ 18:00  
 ④ // 12月21日(月) 13:00 ~ 16:30  
 ⑤平成5年2月4日(木) 14:00 ~ 16:00  
 ⑥ // 3月11日(木) 14:00 ~ 16:00
  
- ・機材部会 ①平成4年10月6日(火) 14:30 ~ 16:30  
 ② // 11月13日(金) 13:00 17:00  
 ③ // 12月1日(火) 14:00 18:00  
 ④ // 12月22日(火) 14:00 17:30  
 ⑤平成5年1月6日(水) 14:30 17:30  
 ⑥ // 1月12日(火) 14:30 17:30  
 ⑦ // 3月16日(火) 14:00 17:00
  
- ・各部長会 ①平成5年1月19日(火) 14:00 17:00

### ・JDR五者協議

- ①平成4年4月24日(金)
- ② // 5月11日(月) 16:00 ~ 17:20
- ③ // 6月18日(木) 14:30 ~ 16:30
- ④ // 7月20日(月) 14:00 ~ 16:00
- ⑤ // 9月30日(木) 16:00 ~ 18:30
- ⑥平成5年2月9日(火) 14:00 ~ 16:00

## 平成4年度JMTDR/JDR 各種研修会開催状況

### ・JMTDR

#### 1) 導入研修会

- |                    |                               |
|--------------------|-------------------------------|
| (1) JMTDR第12回導入研修会 | 平成4年7月24日～26日<br>河口湖レイクランドホテル |
| (2) JMTDR第13回導入研修会 | 平成4年11月20日～22日<br>大阪武田薬品工業    |
| (3) JMTDR第14回導入研修会 | 平成5年2月19日～21日<br>山中湖          |

#### 2) リーダー研修会

- |                     |                            |
|---------------------|----------------------------|
| (1) JMTDR第2回リーダー研修会 | 平成4年5月15日～16日<br>関西セミナーハウス |
| (2) JMTDR第3回リーダー研修会 | 平成4年9月12日～13日<br>千葉幕張メッセ   |

### ・JDR救助チーム

#### 1) 機材習熟訓練

- |                        |                               |
|------------------------|-------------------------------|
| (1) JDR救助チーム 第4回機材習熟訓練 | 平成4年6月3日～5日<br>帝国繊維(株)鹿沼工場    |
| (2) JDR救助チーム 第5回機材習熟訓練 | 平成4年10月14日～16日<br>帝国繊維(株)鹿沼工場 |

#### 2) リーダー研修会

- |                         |                               |
|-------------------------|-------------------------------|
| (1) JDR救助チーム 第4回リーダー研修会 | 平成4年6月25日～26日<br>JICA本部第12会議室 |
| (2) JDR救助チーム 第5回リーダー研修会 | 平成4年11月12日～13日<br>JICA本部第8会議室 |







(1) JMTDR導入研修会





— 第12回JMTDR研修会 参加者リスト —

	氏名	職種	所属先	グループ	備考
1	伊藤清臣	医師	群馬県衛生環境研究所	A	
2	梶原浩嗣	〃	日本医科大学付属多摩永山病院	B	
3	桐岡智二	〃	名古屋大学医学部附属病院	D	
4	近藤英司	〃	帝京大学医学部附属市原病院	A	
5	笹川睦男	〃	国立療養所寺泊病院	C	
6	渋谷健司	〃	帝京大学医学部附属市原病院	C	
7	建野正毅	〃	国立病院医療センター	D	
8	秦 堅佐工	〃	小平記念東京日立病院	A	
9	藤塚光慶	〃	松戸市立病院	B	
10	宮坂勝之	〃	国立小児病院	C	
11	横田裕行	〃	日本医科大学付属病院	D	
12	浅岡和正	看護師	財団法人鳥潟免疫研究所鳥潟病院	A	
13	石原美和	看護婦	筑波大学大学院	B	
14	宇田山 明子	〃	国立病院医療センター	C	
15	大塚 恵	〃	聖マリアンナ医科大学東横病院	D	
16	今野陽子	〃	名古屋共立病院	A	
17	鈴木 多美子	〃	国立病院医療センター	B	
18	田中智子	〃	済生会滋賀県病院	C	
19	田中高政	看護師	稲荷山医療福祉センター	D	
20	中村 かすみ	看護婦	国立病院医療センター	A	
21	平松賢治	看護師	油壺エデンの園	B	
22	前本由紀	看護婦	大阪府立千里救命救急センター	C	
23	實吉 佐知子	〃	国立病院医療センター	D	
24	榎本記子	調整員	静岡市立東中学校	B	
25	後藤昭夫	〃	国立病院医療センター	A	
26	広瀬 美知子	〃	日本医科大学付属病院	C	
27	湯浅敏男	〃	(合資)湯浅商店	B	

講師・スタッフ

	氏名	所属先	備考
28	本多憲児	医療法人 知心会 本多記念東北循環器科病院	
29	今川八束	麻布大学環境保健学部環境微生物教室	
30	山本保博	日本医科大学付属多摩永山病院救命救急センター	
31	奥村悦之	高知学園短期大学衛生技術課	Aグループ評価担当
32	高橋有二	日本赤十字医療センター	
33	谷 莊吉	上尾甕生病院	Bグループ評価担当
34	東浦洋	日本赤十字社事業局救護・福祉部	Cグループ評価担当
35	村瀬吉隆	日本赤十字社	
36	喜多悦子	国立病院医療センター国際医療協力部	
37	金田正樹	聖マリアンナ医科大学東横病院	Dグループ評価担当
38	二宮宣文	日本医科大学付属病院救命救急センター	Aグループ評価担当
39	濱口芳雄	外務省大臣官房一般診療所	Bグループ評価担当
40	伊藤亜人	東京大学教養学部	
41	高玉正彦	国際通信施設 株式会社	
42	奥村順子	財団法人 国際保健医療交流センター	Cグループ評価担当
43	山崎達枝	都立松沢病院精神科	Dグループ評価担当
44	塚本香代美	財団法人 国際看護交流協会	
45	井上 淳	社団法人 東京都臨床衛生検査技師会	
46	算 克彦	JICA国際緊急援助隊事務局	
47	古屋年章	JICA国際緊急援助隊事務局	
48	木村 まゆみ	JICA国際緊急援助隊事務局	
49	古川光明	JICA国際緊急援助隊事務局	
50	河野嘉仁	(財) 国際協力サービスセンター	
51	奥山亮子	(財) 国際協力サービスセンター	Aグループ補助
52	熊田恵子	(財) 国際協力サービスセンター	Bグループ補助
53	上野貞信	(財) 国際協力サービスセンター	
54	淵上 いさ子	(財) 国際協力サービスセンター	Cグループ補助
55	芝口敬子	(財) 国際協力サービスセンター	Dグループ補助
56	松谷曜子	(株) 国際協力出版会	

## 第 1 3 回 J M T D R 研修会プログラム

	時 間	プ ロ グ ラ ム	場 所	備 考
第 1 日  11 月  20 日	12:45 13:00-	武田製薬 研修所 大研修室集合 受付 開会式	大研修室 〃	司会：古川 挨拶：古屋、太田 古屋  木村 JICA他  木村 金田 二宮 二宮 鶴飼、仲佐 杉本  くつろぎ ゾーン
	-13:30	オリエンテーション、委員・講師紹介	〃	
	14:00--	国際協力事業団の事業説明、	〃	
	--15:00	国際緊急援助隊概要及びJMTDR概要説明	〃	
	15:00--15:30	登録システム、傷害保険、出張時の身分等説明	〃	
	15:30--15:45	質疑応答	〃	
	15:45--16:00	コーヒープレイク	〃	
	16:00--16:30	出発から現地到着まで	〃	
	16:30--16:45	携行機材等説明	〃	
	16:45--17:25	グループینگ	〃	
	17:25--18:25	シミュレーション方式の説明 設問1「活動開始にあたって」	〃	
18:25--20:05	設問2「活動中の心構え」	〃		
20:05--21:30	懇親会	くつろぎ ゾーン		
第 2 日  11 月  21 日	07:30--09:00	朝 食	食 堂	奥村、上原  山崎  東浦 今川  今川 奥村 山本  医師：仲佐、看護婦：山崎 調整員：加藤  山本
	09:00--10:00	設問3「異文化理解」	大研修室	
	10:00--10:15	コーヒープレイク	〃	
	10:15--12:00	設問4「医療活動」	〃	
	12:00--13:00	昼食	食 堂	
	13:00--14:00	設問5「調整・協力」	大研修室	
	14:00--14:45	設問6「個人衛生」	〃	
	14:45--15:00	コーヒープレイク	〃	
	15:00--15:30	講義「個人衛生について」	〃	
	15:30--16:00	講義「水について」	〃	
	16:00--16:15	講義「撤退にあたって」	〃	
16:15--16:45	質疑応答	〃		
16:45--18:15	JDR体験談（医師、看護婦、調整員別）	〃		
18:15--19:15	夕食	食 堂		
19:15--19:30	講義「トリアージについて」	大研修室		
19:30--20:00	質疑応答及び討論会	〃		
20:00--	訓練準備（事務局）	〃		
第 3 日  11 月  22 日	07:30--09:00	朝 食	食 堂	JICA 村瀬 高橋 KTI 森田ポンプ、二宮  JICA 本多
	09:00	野外訓練の方法説明	202A	
	~	野外訓練 { 1.包帯法、担架 2.ロープ法 3.インマルサット 4.テントの取扱い及び設定	202B 大研修室	
	11:45	レポート作成	〃	
	11:45--12:00	修了式	〃	
	12:00- 12:15	講 評	〃	
	12:15	昼 食	食 堂	
13:00-	閉会の辞 解 散			

(敬称略)

—— 第13回JMTDR研修会 参加者リスト ——

受講者—

	氏名	職種	所属先	グループ	備考
1	逢坂悟郎	医師	中町赤十字病院	A	
2	片山正一	〃	国立呉病院	B	
3	北原茂実	〃	帝京大学脳神経外科	C	
4	木下牧子	〃	国立病院医療センター	D	
5	正久康彦	〃	和白病院	A	
6	宮坂恵子	〃	国立小児病院	B	
7	石井義秀	看護師	医療法人 大宗会 宗野病院	A	
8	石井好美	看護婦	なし	B	
9	板野優子	〃	BAXTER 株式会社	C	
10	越村幸加	〃	外務省	D	
11	小林美穂子	〃	飯田市立病院	A	
12	澤本万喜子	〃	オムロン 株式会社	B	
13	俵和子	〃	なし	C	
14	丁野美智	〃	大阪府立千里救命救急センター	D	
15	土屋勢津子	〃	都立広尾病院	A	
16	名和むつみ	〃	済生会熊本病院	B	
17	樋口千恵美	〃	日本医科大学付属病院	C	
18	堀下直美	〃	済生会熊本病院	D	
19	東岡牧	〃	愛知国際病院	C	
20	宮崎朋子	〃	社会保険中央総合病院	D	
21	梅井敦子	調整員	お茶の水ゼミナール	A	
22	佐藤和子	〃	なし	B	
23	鈴木弘子	〃	済生会西条病院	C	
24	曾我部信也	〃	済生会川口総合病院	D	
25	藤山弘司	〃	済生会福岡総合病院	A	
26	野田兼義	〃	株式会社 ミリエーム	B	

聴講生

	氏名	職種	所属先	グループ	備考
27	当 广 美 樹	医 師	大阪府立千里救命救急センター	C	
28	谷 口 一 則	〃	大阪府立千里救命救急センター	D	
29	京極 多歌子	看護婦	大阪府立千里救命救急センター	A	
30	高 江 萬 里	〃	大阪府立千里救命救急センター	B	
31	田 本 敬 子	〃	大阪府立千里救命救急センター	C	
32	若 狭 真 美	〃	大阪府立千里救命救急センター	D	



講師・スタッフ

	氏名	所属先	備考
33	本多 憲 児	医療法人 知心会 本多記念東北循環器科病院	
34	太田 宗 夫	大阪府立千里救命救急センター	
35	今川 八 束	麻布大学環境保健学部環境微生物教室	
36	山本 保 博	日本医科大学救命救急医学・救急センター	
37	奥村 悦 之	高知学園短期大学衛生技術課	Bグループ
38	高橋 有 二	日本赤十字医療センター	
39	鶴 飼 卓	大阪府立千里救命救急センター	Dグループ
40	東 浦 洋	日本赤十字社事業局救護・福祉部	
41	村 瀬 吉 隆	日本赤十字社	
42	二 宮 宣 文	日本医科大学付属病院救命救急センター	Aグループ
43	金 田 正 樹	聖マリアンナ医科大学東横病院	Bグループ
44	杉 本 勝 彦	北里大学救急医学	Aグループ
45	上 原 鳴 夫	国立病院医療センター	Cグループ
46	仲 佐 保	国立病院医療センター	Dグループ
47	山 崎 達 枝	都立松沢病院	Cグループ
48	加 藤 茂 夫	加藤システムサービス	
49	高 玉 正 彦	国際通信施設株式会社	
50	曾 根 良 孝	森田ポンプ	
51	古 屋 年 章	J I C A国際緊急援助隊事務局	
52	木村 まゆみ	J I C A国際緊急援助隊事務局	
53	古 川 光 明	J I C A国際緊急援助隊事務局	
54	内 山 博	(財)国際協力サービスセンター	
55	奥 山 亮 子	(財)国際協力サービスセンター	
56	成 義 勝	(財)国際協力サービスセンター	
57	片山 裕美子	(財)国際協力サービスセンター	
58	芝 口 敬 子	(財)国際協力サービスセンター	

第14回JMTDR研修会プログラム

	時 間	プ ロ グ ラ ム	場 所	備 考
第1日 2月19日 (金)	09:30	新宿駅西口朝日生命ビル前集合		
	09:45-	新宿駅西口朝日生命ビル前		
	-12:00	富士青少年センター着 (山中湖)		
		受付		
	12:15--13:00	昼食	食 堂	
	13:00-	開会式	ホ ール	司会：西田
	-13:30	オリエンテーション、委員・講師紹介	〃	挨拶：寛、本多
	13:30- 14:05	国際協力事業団の事業説明、	〃	寛
	14:05 -14:40	国際緊急援助隊概要及びJMTDR概要説明	〃	設案、寛
	14:40-	登録システム、傷害保険、出張時の身分、出発	〃	西田
	15:15	から現地到着までの概要説明	〃	
	15:15--15:30	質疑応答	〃	
	15:30--15:45	携行機材等説明	〃	金田
15:45--16:00	シミュレーション方式の説明	〃	二宮	
16:00--16:40	グループピング (コーヒーを飲みながら)	〃	二宮	
16:40--17:40	設問1「活動開始にあたって」5-25-15-15	〃	山本	
17:40--19:20	設問2「活動中の心構え」5-45-25-25	〃	上原	
19:20--20:00	訓練準備 (事務局)	〃		
20:00--21:30	懇親会	食 堂		
第2日 2月20日 (土)	07:30--09:00	朝 食	食 堂	
	09:00--10:00	設問3「異文化理解」5-20-20-15	ホ ール	金田
	10:00--10:15	コーヒープレイク	〃	
	10:15--12:00	設問4「医療活動」5-50-25-25	〃	山崎
	12:00--13:00	昼食	〃	
	13:00--14:00	テントの取扱い及び設定	体 育 館	森田ポンプ、二宮
	14:00--15:00	設問5「調整・協力」5-25-15-15	ホ ール	上原
	15:00--15:15	質疑応答	〃	
	15:15--15:30	コーヒープレイク	〃	
	15:30--16:15	設問6「個人衛生」5-20-20	〃	今川
	16:15--16:45	講義「個人衛生について」	〃	今川
	16:45--17:15	講義「水について」	〃	奥村
	17:15--17:45	講義「国際災害援助活動」	〃	野田
	17:45--18:30	JDR体験談 (医師)	〃	仲佐
18:30--19:15	夕食	〃		
19:15--20:00	JDR体験談 (看護婦)	〃	山崎	
20:00--22:00	野外訓練の方法説明	〃	西田	
	野外訓練 {	第一会議	村瀬	
	1.包帯法、担架	〃	高橋	
	2.ロープ法	〃	高玉 (KTI)	
	3.インマルサット	屋 外		
第3日 2月21日 (日)	07:30--09:00	朝 食	食 堂	
	09:00--09:30	講義「撤退にあたって」	ホ ール	山本
	09:30--09:45	質疑応答	〃	
	09:45--10:15	講義「トリアージについて」	〃	山本
	10:15--10:30	コーヒープレイク	〃	
	10:30--11:15	JDR体験談 (調整員)	〃	安藤
	11:15--11:45	質疑応答及び討論会	〃	二宮
	11:45--12:15	レポート作成	〃	
	12:15--12:30	修了式	〃	寛
		講 評	〃	二宮
		閉会の辞	〃	寛、本多
12:30-	昼 食	食 堂		
-13:15				
13:15-	解 散			

(敬称略)

— 第14回JMTDR研修会 参加者リスト —

受講者

	氏名	職種	所属先	グループ	備考
1	浅井康文	医師	札幌医科大学付属病院	A	
2	大泉旭	〃	日本医科大学付属病院	B	
3	大塚哲生	〃	日本医科大学付属病院	C	
4	河合稔	〃	関西労災病院	D	野外訓練A
5	椎名丈城	〃	国立病院医療センター	C	
6	竹内宗和	〃	東京女子医科大学病院	B	
7	中林基明	〃	日本医科大学付属病院	A	
8	天井久美子	看護婦	済生会新潟第二病院	A	
9	石井和代	〃	済生会新潟第二病院	B	
10	伊藤祐美	〃	なし	C	
11	大久保みつ子	〃	東京日立病院	D	野外訓練A
12	太田陽子	〃	日本医科大学付属病院	A	
13	川崎佳子	〃	栃木県済生会宇都宮病院	B	
14	熊谷薫	看護婦	栃木県済生会宇都宮病院	D	野外訓練B
15	越村幸加	〃	外務省	A	
16	嵯峨昌紀子	〃	都立牛込職業専門学校	B	
17	佐藤憲明	看護師	日本医科大学付属病院	D	野外訓練B
18	林幸世	看護婦	洛和会音羽病院	C	
19	日向寺美和子	〃	なし	A	
20	早川節子	〃	済生会新潟第二病院	C	
21	藤田昌久	看護師	日本医科大学付属病院	B	
22	榊村千恵子	看護婦	済生会新潟第二病院	D	野外訓練C
23	吉野望	〃	なし	C	
24	小倉信作	調整員	姫野病院	A	
25	七嶋和孝	〃	国立長崎中央病院	B	
26	西澤健司	〃	日本医科大学付属病院	C	
27	吉田健一	〃	なし	D	野外訓練C

講師・スタッフ

	氏名	所属先	備考
28	本多憲児	医療法人知心会 本多記念東北循環器科病院	
29	今川八東	麻布大学環境保健学部	Cグループ
30	山本保博	日本医科大学救急医学科	
31	奥村悦之	高知学園短期大学衛生技術科	Aグループ
32	高橋有二	日本赤十字医療センター	
33	村瀬吉隆	日本赤十字社	
34	稲田美和	日本赤十字社事業局看護部次長	
35	二宮宣文	日本医科大学付属病院救命救急センター	Aグループ
36	金田正樹	聖マリアンナ医科大学東横病院	Bグループ
37	上原鳴夫	国立病院医療センター	Cグループ
38	仲佐保	国立病院医療センター	Dグループ
39	山崎達枝	都立松沢病院	Bグループ
40	奥村順子	財団法人 国際保健医療交流センター	
41	安藤二葉	JMTDR登録調整員	Dグループ
42	高玉正彦	国際通信施設株式会社	
43	曾根良孝	森田ポンプ	
44	設楽清	外務省経済協力局国際緊急援助室	
45	算克彦	JICA国際緊急援助隊事務局 業務課	
46	西田義弘	JICA国際緊急援助隊事務局 管理課	
47	古川光明	JICA国際緊急援助隊事務局 業務課	
48	内山博	(財)国際協力サービスセンター	
49	奥山亮子	(財)国際協力サービスセンター	
50	上野貞信	(財)国際協力サービスセンター	
51	小沼明子	(財)国際協力サービスセンター	
52	芝口敬子	(財)国際協力サービスセンター	

# J M T D R 研修会資料

< 参考 >

シミュレーション

設問及び回答集

平成4年

国際協力事業団 国際緊急援助隊事務局

### 設問 1. 「活動開始にあたって」

現地で医療活動を開始するにあたってどのような情報を必要としますか。  
また、どのような方法で入手しますか。

### 回答 1

- ①・被災国の受け入れ態勢
  - ・現地の被災状況
  - ・現地の医療活動（医療資材の調達、近くの病院への重症患者の後送等）の状況
  - ・現地での国際機関やNGOの動向
  - ・隊員の住居
  - ・要請内容の再確認等
- ②・現地日本大使館及びJICA事務所での聴取
  - ・災害対策本部での聴取
  - ・国際機関出先事務所での聴取
  - ・他国援助隊及びNGOからの聴取等

### 設問 2. 「活動中の心構え」

あなたはJMTDRの一員として被災現場へ派遣されました。

- ① 活動中内紛が勃発したとの噂が入りました。  
どう対処しますか。

### 回答 2

- ①・大使館、JICA事務所及び災害対策本部等に確認のうえ、情報の収集及び必要な指示を仰ぐ。
  - ・日本側マスコミあるいはラジオ、テレビ等を通じ正確な情報の入手を図る。避難が必要な場合、メンバーに急報のうえ、大使館及び大使公邸に避難するよう指示する。
  - ・全員の無事を早急に確認したうえで大使館、JICA事務所に報告する。避難場所の安全確認をしたうえで、食料、飲料水の確保をする。その後、本国と連絡をとりつつ帰国に備える。  
パスポート、現金等を身につけさせるよう指示をする。
  - ・隊員の無事を速やかに本邦に報告する。

### 設問 3. 「異文化理解について」

JMTDRのメンバーが礼拝に行こうとしていたカウンターパートを忙しいからと引き止めたところ、カウンターパート全員が翌日から就労を拒否する事態となりました。

どう対処しますか。

### 回答 3

- ・予め相手国の宗教、習慣等を理解しておく。
- ・民族性の違いを認識して対応する。
- ・当方の非を認め謝る。再発防止を約し、相手の協力を求める。
- ・地域の有力者（村長、牧師等）と連絡を取り仲介に入ってもらう。

#### 設問 4. 「医療活動」

- ① 災害対策本部から、JMTDRの活動拠点として2張りのエアテントを使用して外来を中心とした診療を開始するよう連絡がありました。  
なお、各テントには、二折ベッド10、折畳デスク2、折畳イス2が用意してあります。(各テントには、二折ベッド10ぐらい入るスペースがあります。)  
次の項目について、具体的な活動計画を立てて下さい。
- (1) 外来棟設営
  - (2) 医療計画
- ② 毎日250名程度の患者が受診するようになり、忙しい中にも落ち着きを取り戻してきた。午後5時、突然、ここから10分程度の山の中に20家族程度の人達を取り残されており、ヘリコプターのピストン輸送でこちらに運んでくるとい連絡がありました。  
どう対処しますか。
- ③ 隊員用の抗生物質を使って重症患者をようやく治しました。翌朝隣のPAHOから5人の重症患者が無断で入院して来ていました。現地人のアシスタントによると、転院して来たいという患者がもっとたくさんいるとのことでした。  
どう対処しますか。

#### 回答 4

- ① (1)
- ・医療活動よりスタッフの生活環境を考えた配置を考える。(スタッフのアコモデーション第1)
  - ・スタッフの休息室は病室と隔離した所に配置する。
  - ・機材置場は盗難防止の為にスタッフの生活空間内に設置する。
  - ・患者の流れを考慮した配置をする。
  - ・トイレと給仕場は、必ず離して設置する。
- (2)
- ・24時間3交替制が原則。
  - ・病棟経営はサブリーダーがその任にあたる。
  - ・外来、トリアージ、病人側への病状等の説明は主として現地人スタッフ(医師看護婦等)が執り行うようにする。
  - ・生死のトリアージは慣れた医師が行なう。
  - ・日本的感覚での診療、トリアージはせずに現地人医師と相談し活動にあたる。
  - ・カルテの記入は、日本チーム引き上げ後の他の救援チームへの連絡も考慮し英語で記入する。
  - ・遺体は衆人の目に見える所に絶対に置かない。又、礼拝堂を霊安室として使用することは宗教的側面からの考慮も必要。
  - ・遺体の処理に関しては風習などを考慮して、現地の人々に任せる。
  - ・現地ヘルパーは可能な限り多くの人を集めるよう努める。
  - ・活動状況によっては後続のチームの要請を検討する。
  - ・何が出来るかの判断より、何を切り捨てるのかの判断に尽力する。

- ②・運び込まれた患者への即時対応。(人員、機材の手配)
- ・次に運び込まれる患者への対応。(人員、機材の手配)
- ・第一次搬入者からの情報収集。(二次への判断)
- ・引き返す人々への対応。(食料、水、毛布等を持たせるか)
- ・当方のスタッフを現地へ向かわせるか。(現地でのトリアージ、治療、救急医薬品の携行の必要性の有無の判断)
- ・搬送時の救急処置の必要性の有無。
- ・二次、三次搬入患者への対応。(衣、食、住の確保)
- ・他の機関への連絡、通報、援助要請等。
- ③・現地医療レベルの理解
  - 被災国の社会構造と医療の伝統を理解し、尊重すること。
  - 治癒を目指よりも予防や改善を目指すことを優先する。
- ・第3世代抗生物質を用いることの危険性の理解。(高級抗生物質の使用は可能な限り控える。)
- ・他のチームと治療方法につき協議のうえ、チーム間に治癒レベルの差が出ないように努める。
- ・移動してきた患者に対し日本チームには取容できない旨十分説明し、PAHOチームに了解のうえ患者を引き渡す。

#### 設問 5. 「調整・協力」

- ① 災害対策本部での各国援助隊、NGOとの緊急合同会議に出席しました。その席上で対策本部から、是非ともあるNGOにJMTDRの1台しかない心電図付除細動器の一時貸与と活動用医薬品の無償供与を行って欲しい旨要請がありました。どう対処しますか。
- ② 現地活動の5日目、野戦病院で共同活動中の被災国の医療チームのメンバーとJMTDR隊員とが治療方法の違いをめぐって論争となり、その結果、被災国チームが共同活動を中止したいとの騒ぎとなりました。どう対処しますか。

#### 回答 5

- ① チーム内での必要性、使用計画について検討する。
  - ・ 重要機器であり、貸し出しできない事情を説明し、丁重に断わる。余裕がある場合にかぎり貸し出すが、その場合には災害対策本部から借用書を取り付けるとともに、機材の公的性格を説明し、取り扱いにつき注意を喚起し必ず返却するよう強く申し入れる。
  - ・ チーム活動用の貴重な医薬品であり、しかも残量が少なくなりつつある事情を説明し、丁重に断わる。余裕がある場合にかぎり供与するが、その場合には災害対策本部から受領書を取り付けるとともに、医療事故が発生しないよう、使用にあたっては特に医薬品の取り扱いにつき慎重を期すよう注意を喚起する。
- ② ・ 隊員に対し他チームとの協調活動の重要性を終始徹底する。
  - ・ 交渉に際しては、団長がその任にあたる。
  - ・ 対策本部と相談のうえ、協調に努める。



設問 6. 「個人衛生」

- ① 個人用にどのような医薬品を用意しますか。
- ② 身体がだるく、検温したところ37.5度ありました。どう対処しますか。
- ③ 腹痛があり、朝下痢をしました。そのまま仕事につきましたが夕方までに3回下痢が続きました。吐き気はなく、熱感もありません。どう対処しますか。

回答 6

- ① 胃腸薬、下痢止め（正露丸等）、鎮痛剤、睡眠薬、乗り物酔い予防薬、ハンドクリーム等日常使い慣れた薬を個人用として持参したほうが良い。
- ② 特に、咽頭痛や筋肉関節痛もない単なる風邪様症状で、発熱も38度以下の場合、まず解熱剤を服用し、無理をせず十分な睡眠を心がける。この段階での抗生剤の服用は避ける。通常は2～3日で回復するが、解熱傾向が見られない時あるいは他の病状が出現した場合は医師に相談する。腸チフス、マラリア、肝炎をはじめとする大多数の急性感染症は風邪様症状から始まることが多い。
- ③ 生活環境が変わると、水質の変化（特に硬水）や腸内細菌の変動によって、程度の差こそあれ下痢に見舞われることは多い。発熱37.5度以下、1日3～4回程度の軟便～水様便で粘血が混じっていない場合は、先ず正露丸（商品名）かロベミン（商品名）、あるいは止痢剤で様子を見、食事に注意する。アルコール類は避ける。通常は3日以内に回復するが、症状増悪の場合は医師に相談しなければならない。

補追：②、③の場合は必ず団長に申し出るようにする。



(2) JMTDRリーダー研修会



第2回JMTDRリーダー研修プログラム

月日	時間	プログラム	備考
第1日 5月15日	11:00	北大路駅集合（時間厳守）	
	11:45	受付開始	
	12:15～13:00	昼食	
	13:00～13:30	開会式 開会の挨拶 オリエンテーション 講師、オブザーバー等紹介	
	13:30～13:50	- 導入、K-J法の説明	
	13:50～15:40	セッション1	
	15:40～15:50	休憩	
	15:50～18:00	セッション2	
	18:00～19:00	夕食	
	19:00～20:20	セッション3	
	20:20～20:30	休憩	
	20:30～20:45	体験談 「Field Hospitalの設営」	
	21:00～21:15	体験談 「チーム撤収の時期とその要点」	
	21:15～21:40	質疑応答及び総評	
21:40～22:00	「大空を超えて」ビデオ上映		
第2日 5月16日	08:00～09:00	朝食	
	09:00～09:50	講義「インマルサット」	
	09:50～10:00	休憩	
	10:00～10:50	講義「水について」	
	10:50～11:00	休憩	
	11:00～12:00	講義「最新の伝染病の動向」	
	12:00～13:00	昼食	
	13:00～13:50	講義「異文化理解」	
	13:50～14:00	休憩	
	14:00～14:30	アンケート記入	
	14:30～15:00	講評・修了式 解散	

第2回JMTDRリーダー研修参加者名簿

1. 受講者

No	氏名	所属先	備考
1	朝日茂樹	横浜新都市脳神経外科病院	
2	新崎康博	国立病院医療センター	
3	安藤 享	国立病院医療センター	
4	伊勢 泰	国立病院医療センター	
5	井上 清	済生会中央病院	
6	今村純一	国立下関病院	
7	上原鳴夫	国立病院医療センター	
8	大久保 忠成	済生会中央病院	
9	甲斐達朗	大阪府立千里救命救急センター	
10	清水 聡	京都南病院	
11	田辺清勝	厚生省九州地方医務局	
12	常光謙輔	済生会西条病院	
13	服部昌和	福井県成人病センター	
14	濱口芳雄	外務省大臣官房一般診療所	
15	前田憲昭	医療法人 社団皓歯会	
16	三村哲重	岡山済生会病院	
17	山寄正人	大阪労災病院	
18	村田 三紗子	都立墨東病院	
19	山下雅知	敬愛会 中頭病院外科	
20	渡辺全夫	渡辺病院附属診療所	

2. 講師、事務局

No	氏名	所属先	備考
21	本多憲児	医療法人 知心会 本多記念東北循環科病院	
22	山本保博	日本医科大学付属多摩永山病院 救命救急センター	
23	鶴飼卓	大阪府立千里救命救急センター	
24	奥村悦之	高知学園短期大学衛生技術科	
25	高橋有二	日赤医療センター外科	
26	谷庄吉	上尾甞生病院	
27	稲田美和	日本赤十字社事業局看護部	
28	金田正樹	聖マリアンナ医科大学東横病院	
29	天野博之	天理よろず相談所病院	
30	栗本英世	国立民族学博物館	
31	高玉正彦	国際通信施設(株)	
32	奥村順子	財団法人 国際保健医療交流センター	
33	算克彦	JICA国際緊急援助隊事務局	
34	西田義弘	JICA国際緊急援助隊事務局	
35	古川光明	JICA国際緊急援助隊事務局	
36	奥山亮子	(財)国際協力サービスセンター	
37	上野貞信	(財)国際協力サービスセンター	
38	芝口敬子	(財)国際協力サービスセンター	

第2回JMTDRリーダー研修会

ケース・スタディ資料

# イラン流入イラク避難民



## イラン・クルド難民への医療協力

Medical support for Kurdish refugee in Iran

金田 正樹\*

Masaki Kaneda

■key words : クルド難民, 野営病院, 国際緊急医療援助

1991年3月初旬、湾岸戦争終結を機にイラク国内でクルド人を中心とした反政府暴動が拡大した。これに対してフセイン政権は容赦ない弾圧を加えた。4月初旬、約200万人に及ぶクルド人難民はパニックにも等しい状態でトルコ、イラン国境へ逃避行を開始した。この地域は2000m以上の山岳地帯であり、彼らは寒さにふるえ、十分な食糧、衣服、テントもなく悲惨な生活を余儀なくされた。国際的援助活動が開始されるなかで、われわれJMTDR（国際緊急援助隊医療チーム）は4月16日、イラン西アゼルバイジャン州の国境の町ナガディ市に到着し、以後約2カ月間にわたりこの地域で難民医療援助を続けた<sup>1)~3)</sup>。

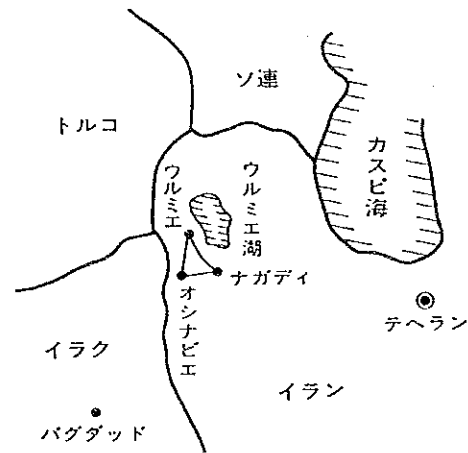


図1

## イマム・ホメイニ病院

テヘランから西北へ800km、イラク国境まで約40kmに位置するナガディは人口1万弱の町で、まずわれわれはここに生活拠点を設けた（図1）。郵便局の2階を借用し、医師3名、看護婦6名、調整員3名からなるチームは自炊しながらの共同生活となった。この町にも難民はあふれ、空き家、ガレージなどに仮の家を求め、また郊外にも簡単なビニールシートで作ったテントで生活していたが、それは決して衛生的といえるものではなかった。州の公衆衛生局との話し合いの結果、当面はこの町唯一の病院、イマム・ホメイニ病院で難民医療活動に協力しつつ、4月末にこの町からさらに国境に近いオシナビエの町に完成するUNHCR（国連高等難民弁務官事務所）のField hospital（野営病院）の運営をわれわれが行うことになった。

イマム・ホメイニ病院は約50床ほどの国営病院で

あるが、その設備、医薬品とも十分ではなかった。これはイラン・イラク戦争が長く続いたためであり、医薬品のみならず医師の数さえ足りない状態であった。ここへ多数の難民患者が押し寄せたために病院は大混乱に陥った。外来は朝から患者であふれ収拾がつかない状態であった。病棟は廊下にも入院患者を収容し、1つの小児用ベッドに3名の乳幼児を寝かせる始末だった（図2）。患者は下痢症状を主とする乳幼児、小児がもっとも多くみられたが、なかには脱水症状を呈した重症例も多かった。1日数例の死亡例をみたが、そのほとんどはこうした脱水症状と肺炎による乳幼児の患者であった。これは、過酷な難民生活においては幼い命が最初に犠牲になっていく事実である。また、慣れないテント生活のなかで、熱傷を受傷する小児も多くみられた。

外科病棟には戦傷患者の入院がほとんどで、銃創、破片損傷、地雷損傷が主であり、なかには10代の少年少女の患者も含まれていた。逃げる途中に地雷を踏んだために下腿の外傷性切断を受けたり、ヘリコプターからの銃撃による四肢外傷であったり、なか

\* 聖マリアンナ医科大学東横病院整形外科医長



図2 下痢症の子供たち



図3 テシマゴール難民キャンプ

には爆弾の破片による腹部外傷などの患者もあった。

この病院に多くの難民患者が来院しだした時期は4月7～10日ころで、1日数百人の患者のため一時はパニック状態になったといわれる。JMTDR 1次チームは、この混乱のさなかにこの病院での活動を開始した。

われわれのこの病院への協力は、イラン各地から集まった応援ボランティアとともに医師は外来を中心に診療し、看護婦は病棟へと分担を決められた。とくに小児病棟においてはおむつさえ不足し、ベッド上の患者は汚物で汚されている状態で、保育器も満足にないなか、点滴、授乳、おむつ交換などで多忙をきわめた。

われわれがこの病院で行った手術は13例で、その内訳は、腹部の破片損傷の開腹手術が5例、四肢からの弾丸摘出術が1例で、その他にはデブリードマン、切開排膿術などであった。戦争外傷の処置は、創の洗浄、デブリードマン後にDPC (delayed primary closure) を行うことが原則であるが、われわれの到着以前に行った四肢切断例には、1次創縫合をしたために後に重症感染を起こした症例が数例みられた<sup>9)</sup>。

4月25日ころには患者数が極端に減少した。これは、この町の周囲の難民たちがイラン政府が建設したキャンプに收容されたためである(図3)。このころよりこの病院の本来の診療態勢に戻ったが、病院の要請により数名の医療スタッフが以後も勤務を続けた。

短期間の医療協力ではあったが、われわれの医療レベルとでは大きな違いがあることは否めなかった。診療のシステム、看護法、処置法、手術法などに論理的・合理的でない面が多くみられた。現地の医療事情を十分考慮し、その秩序を乱さないことが



図4 野営病院での診療

われわれ外国からの飛び込み医療班の基本的な姿勢であることを十分認識させられた。緊急医療協力の範囲を超えた高度な医療は決して行ってはならないし、われわれの方法を押しつけてはならない。現地の医療レベルを早く認識し、それに沿った協力がもっとも重要であると考ええる。

#### オシナビエ野営病院

4月30日、約5万人を收容するウルドガ、テシマゴール2つの難民キャンプの中間点に位置するオシナビエの町はずれに野営病院が完成した。幅10m、長さ24mの大型テント2棟からなるこの病院には簡易の手術室とトイレが併設された。テント、医療器械はすべてノルウェー政府が供与し、1棟は外来に、1棟は病棟用使用する予定であった(図4)。病院の開設と同時に多くの患者が押しかけてきたが、このなかには近隣のイラン人の患者も含まれていた。朝9時～夕方5時を診療時間とし、混乱を避けるために外で順番札を渡し、1人ずつテント内に

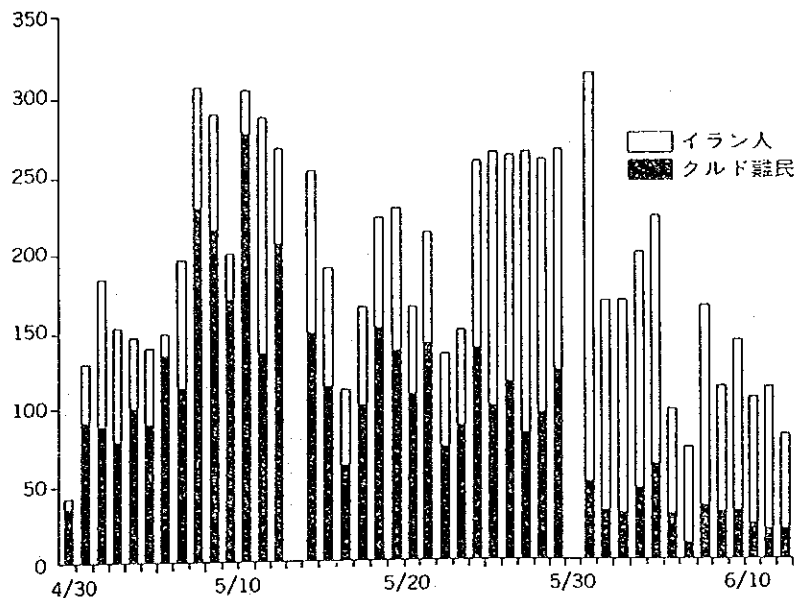


図5 オシナビエ野営病院患者数

入れて、テント内の受付にてイラン人かイラク人かを区別し、通訳が症状を英文でメモ用紙に書き、医師に渡す方法をとった。視診で診断できるものは別として、なお詳しい問診を必要とする場合は通訳を介しての診療となる。

患者の多くは感冒、中耳炎、眼科疾患、皮膚炎、腰痛、膝関節症などの慢性疾患がほとんどであった。しかし、来院する患者の2~3割は重症例であり、ここでも乳幼児の下痢を主とする患者が多く、次に腸チフス、アメーバ赤痢、肺炎の順であった。時間的経過とともに両キャンプ内の衛生状態が悪化したために、朝から高熱を有する患者が搬送されてきた。軽度の下痢症状の乳幼児患者にはORS（経口補水塩）を投与し、その飲用法を教示した。腸チフス、赤痢に関しては数例であるが、イマム・ホメイニ病院にて糞便より細菌を検出し確定診断ができた。

これらの患者に対してはクロラムフェニコール、テトラサイクリン、アンピシリンなどと、1日1000~1500 mlのリンゲル液を投与した。

伝染性、感染性疾患の患者のうち、症状が重く入院加療が必要と思われる症例も数多くあったが、病棟を開設するには医療スタッフ不足、通訳の当直体制の協力が得られない、夜の安全性の確保、患者の給食体制がとれないなどの理由で断念せざるをえなかった。

手術は、テント内で清潔域を保てないために、そのほとんどは縫合術、切開排膿術、小さな植皮術、良性腫瘍の摘出術など約80例の小外科的なもので

あった。しかし数例ではあるが、開放性骨折の新鮮例の処置、背部からの弾丸摘出術も経験した。当初、UNHCRはこの病院を外科病院としての機能をもたせるつもりであったが、開設時にはすでに外傷患者はほとんどなく、その時は過ぎていた。今回のような戦争難民の流入は最初、外傷患者が数多く来院し、その次に感染症、伝染病を含む内科的的患者が増加したという特徴がみられた。戦争難民援助には外科医、内科医の混合医療チームが望ましい。

病院の運営上もっとも大きな問題は医学的知識をもった通訳の存在である。今回はイラン政府からボランティアとして6名の看護学生の協力を得られたが、10代の彼らは、問診から薬の服用法まで患者に通訳しなければならず、多忙をきわめた。通訳を含めたローカルスタッフの存在が医療協力での成功につながっているといっても過言ではない。

この野営病院は4月30日~6月13日の45日間開設されたが、その患者総数は8120名であった。クルド難民の患者は5月中旬にピークを迎え、それ以後は漸次減少傾向にあった。このころより難民の帰国が始まり、6月に入ると彼らは極度に減少した(図5)。

逆に、近隣のイラン人患者が増加し、われわれの撤収時期はこのころに決定した。この病院での活動期間中に非常に官僚主義的な州政府の査察を二度受けたために、2日間まったく診療活動ができなかった。イラン・イラク戦争ではかつて敵国であったイラクからの大量難民に対して、イラン政府は早期から難民キャンプを建設し、救援物資を送り、多くの

人々がボランティア活動に着手したことは感動的であった。しかし、とくに西アゼルバイジャン州は民族的・宗教的問題が複雑であり、今回のような各国の緊急援助が大量に入ったことは、イラン政府としてはかなり神経質にならざるをえなかった。こうした地域での医療活動は、政治的な配慮を念頭において行動しなければならない。

## 問題点

### 1. 活動拠点の選択

第1次チームが現地に入った時点で州の公衆衛生局と話し合い、難民キャンプに併設した活動をするか、UNHCRに協力する活動かの二者択一を迫られた。安全性の確保、病院としての規模、重症患者のケアなどチームとしてその能力が十分に発揮できると判断し、後者を選択した。それは、広いスペースのテントのなかで整然と数多くの難民患者を診察できたことで、チーム能力は十分発揮できたと考えた。しかし、難民キャンプに併設していないため近隣のイラン人患者も診療しなければならなかったこと、イマム・ホメイニ病院へスタッフが分散したことで入院医療を断念せざるをえなかった。基本的には、やはりキャンプに併設した活動を行ったほうが効率的であり、対外的なアピールもできたであろう。しかし、またイマム・ホメイニ病院と掛け持ちとしたことで、現地の医療レベルを知ることができたことも大きな収穫であった。

### 2. JMTDRの派遣

今回は出動が早く、早期に現地で活動ができたことでイラン政府からの評価は高かった。われわれは専用機を持たないので、輸送能力においては欧米諸国のそれと比較して劣るものがある。緊急医療援助のための輸送能力は、その成果に大きな影響を与える。これは今後の大きな問題である。また、チームとしては撤収まで第5次チームまで派遣し51名の人員が参加した。しかし、派遣期間が1チーム3週間ではあまりにも短すぎる。これは勤務先が3週間以上の海外出張をなかなか認めてくれないせいである。これにはまず勤務先において、その派遣理由が

国際貢献としての医療援助であることを理解し、ひいては国と医学界全体が後押しする体制をつくり、われわれが長期に現地で活動できるようにしなければならない。

### 3. 郷に従え

活動にあたっては現地での医療事情を十分考慮し、その秩序を乱さないということが基本的な姿勢である。辺境の地で日ごろなかなか十分な医療に接することがない患者たちが、われわれに求めることは現地のそれよりも高度であった。しかし、現地の医療レベルの許容範囲を超えた診療をわれわれは行うべきではないと考える。

## まとめ

- (1) 2カ月間に及ぶクルド難民への医療援助は大きな成果を上げることができた。
- (2) 重症患者は乳幼児の下痢と肺炎、腸チフス、赤痢などの伝染病が主であった。
- (3) 戦争難民の医療援助には、外科医と内科医の混合チームが望ましい。
- (4) 医学知識のある通訳を含むローカルスタッフの確保が重要である。
- (5) 現地での医療活動は、医療レベルを十分考慮したうえで行わなければならない。

### 【文 献】

- 1) 鈴木秀幸：イランクルド難民緊急援助隊活動報告書（1次）。国際協力事業団，1991，pp 1-12.
- 2) 金田正樹：クルド難民救援医療報告書（2次）。国際協力事業団，1991，pp 1-5.
- 3) 灰塚省二郎：クルド難民救援医療報告書（3次）。国際協力事業団，1991，pp 1-4.
- 4) 山本保博：クルド難民救援医療報告書（4次）。国際協力事業団，1991，pp 1-28.
- 5) 鶴飼卓：イラク避難民救済報告書（5次）。国際協力事業団，1991，pp 1-4.
- 6) 金田正樹，杉本勝彦：戦争外傷の経験。整形外科 42：1128-1131，1991.
- 7) Dufour D：Surgery for Victims of War. ICRC, Geneva, 1988, p 14.

第3回JMTDRリーダー研修プログラム

月日	時間	プログラム	備考
第1日 9月12日	11:15	受付開始	
	11:30~11:50	開会式 開会の挨拶 オリエンテーション 講師、オブザーバー等紹介	
	11:50~12:10	- 導入、K-J法の説明	
	12:10~14:00	セッション1	
	14:00~17:00	シンポジウムS5 or S6 (別紙参照)	
	17:10~19:20	セッション2	
	19:20~20:10	夕食	
	20:10~21:00	講義「最近の伝染病の動向」	
第2日 9月13日	09:00~11:30	シンポジウムS7 (別紙参照)	
	11:40~13:00	セッション3	
	13:00~13:30	質疑応答及び総評	
	13:30	懇親会 講評・修了式	
	~15:00	解散	

第3回JMTDRリーダー研修参加者名簿

受講者

No	氏 名	職 種	所 属 先	グループ	備 考
1	明石 秀親	医 師	東京大学付属病院	A	
2	大村 一郎	〃	国立呉病院	B	
3	加藤 元一	〃	国立療養所千石荘病院	C	
4	新藤 正輝	〃	北里大学	A	
5	田村 正徳	〃	東京大学小児科	B	
6	仲佐 保	〃	国立病院医療センター	C	
7	淵崎 祐一	〃	厚生連羽茂病院	A	
8	三井 香兒	〃	東京大学医学部付属病院	B	
9	村田 三紗子	〃	都立墨東病院	C	
10	加藤 奈津子	〃	大阪市立十三市民病院	A	
11	河原 順子	〃	広島県厚生連吉田総合病院	B	
12	北川 真由美	〃	札幌北楡病院	C	
13	佐野 さちよ	〃	船橋市立医療センター	A	
14	田中 かほる	〃	な し	B	
15	中村 勝	看護師	東北福祉大学 (在学中)	C	
16	長島 千枝	看護婦	成東児童保健院	A	
17	西川 富己子	〃	都立府中療育センター	C	
18	小川 修	調整員	な し	A	
19	小川 賢	〃	三井造船 株式会社	B	
20	黒羽 秀明	〃	救世軍清瀬病院	C	
21	斉出 光布	〃	日栄産業	A	
22	重田 裕司	〃	兵庫県立尼崎病院	B	
23	宮尾 眞矢子	〃	CATインテ	C	

講師、スタッフ

No	氏 名	所 属 先	備 考
24	本 多 憲 児	医療法人知心会 本多記念東北循環器科病院	
25	今 川 八 束	麻布大学環境保健学部環境微生物教室	
26	高 橋 有 二	日赤医療センター	
27	東 浦 洋	日本赤十字社事業局救護・福祉部	
28	稲 田 美 和	日本赤十字社事業局看護部	
29	二 宮 宣 文	日本医科大学付属病院救命救急センター	
30	金 田 正 樹	聖マリアンナ医科大学東横病院	
31	奥 村 順 子	財団法人 国際保健医療交流センター	
32	山 崎 達 枝	都立松沢病院	
33	笈 克 彦	J I C A国際緊急援助隊事務局業務課	
34	古 屋 年 章	J I C A国際緊急援助隊事務局業務課	
35	古 川 光 明	J I C A国際緊急援助隊事務局業務課	
36	木 村 聡	J I C A国際緊急援助隊事務局業務課	
37	奥 山 亮 子	(財) 国際協力サービスセンター	
38	星 直 樹	(財) 国際協力サービスセンター	
39	上 野 貞 信	(財) 国際協力サービスセンター	
40	片 山 裕 美 子	(財) 国際協力サービスセンター	
41	芝 口 敬 子	(財) 国際協力サービスセンター	





### (3) J D R 救助チーム機材習熟訓練



第4回国際緊急援助隊救助チーム資機材習熟訓練日程

日 程	内 容 等	会 場
6月3日(水)		
13:00	国際協力事業団(第7会議室:46階)集合	JICA(第7)
	<受付・研修会費徴収>	
13:15	<国際緊急援助局長挨拶>	
	<国際緊急援助局管理課長挨拶>	
	<オブザーバー・事務局紹介>	
	<配布資料説明>	
14:00-	新宿(三井ビル)発	
	(移動の車中において自己紹介及びビデオ数種上映)	
-17:00	鹿沼着	
17:10-	オリエンテーション	A 会 場
	国際協力事業団事業概要説明	
	国際緊急援助体制概要説明	
	共通資機材について	
-18:45	熱画像直視装置等使用説明	
19:00--20:00	夕 食	食 堂
20:00-	各庁別連絡会	A 会 場
6月4日(木)		
07:30--08:00	朝 食	食 堂
08:15	集合	ホテル玄関前
08:30--09:00	習熟訓練方法説明	B 会 場
09:00--12:00	習熟訓練(グループ別)	〃
12:00--13:30	昼食、休憩	食 堂
13:30--16:30	習熟訓練(グループ別)	B 会 場
16:30--17:30	レポート作成	A 会 場
18:30--21:00	懇親会	食 堂
6月5日(金)		
08:00--	朝 食	食 堂
09:00--10:00	総括・閉会	A 会 場
10:30	鹿沼発	
13:30	新宿駅西口解散	

注：A会場(ホテル京屋内)  
 B会場(帝国繊維鹿沼工場内)  
 食 堂(ホテル京屋内)

## 第4回機材習熟訓練参加者名簿

### 1. 受講者

No	氏名	所属先	外-フ	部屋
1	根本 昌幸	〈警〉 北海道警察本部警備部機動隊	A	407
2	稲川 真実	〃 警視庁警備部第二機動隊	B	408
3	佐藤 孝治	〃 警視庁警備部第六機動隊	C	410
4	高階 俊春	〃 埼玉県警察本部警備部機動隊	B	408
5	荒井 卓夫	〃 神奈川県警察本部警備部第二機動隊	C	410
6	塩原 温司	〃 愛知県警察本部警備部機動隊	D	411
7	上山 繁幸	〃 京都府警察本部警備部機動隊	D	411
8	松本 尚夫	〃 大阪府警察本部警備部第一機動隊	E	411
9	灘 正秋	〃 兵庫県警察本部警備部機動隊	E	411
10	佐々木大輔	〃 福岡県警察本部警備部第一機動隊	A	407
11	佐々木千寿	〈海〉 塩釜海上保安部 巡視船おじか	A	606
12	森 直樹	〃 羽田特殊救難基地	B	607
13	松尾 秀昭	〃 羽田特殊救難基地	C	608
14	今野 哲成	〃 横浜海上保安部 巡視船のじま	D	706
15	伊東 弘	〃 鳥羽海上保安部 巡視船いすず	E	707
16	小開 誠一	〃 呉海上保安部 巡視船みさき	A	606
17	平田 博文	〃 福岡海上保安部 巡視船げんかい	B	607
18	鈴木 晴司	〃 新潟海上保安部 巡視船やひこ	C	608
19	日高 弘人	〃 鹿児島海上保安部 巡視船こしき	D	706
20	相曾 利也	〃 第十一管区海上保安部 巡視船もとぶ	E	707
21	瀬下 半治	〈消〉 上越地域消防事務組合消防本部	C	508
22	久米川福司	〃 徳島市消防局	C	508
23	橋口 泰志	〃 鹿児島市消防局	E	510
24	名取 和雄	〃 静岡市消防本部	D	510
25	中山 繁義	〃 八戸地域広域市町村圏事務組合消防本部	A	506
26	瀧 謙一郎	〃 尼崎市消防局	E	510
27	本田 利廣	〃 長崎市消防局	D	510
28	神崎 英樹	〃 岡山市消防局	B	507
29	辻 勇夫	〃 吹田市消防本部	A	506
30	八代 武則	〃 郡山地方広域消防組合消防本部	B	507

## 2. オブザーバー及び事務局

No	氏名	所属先	部屋
31	上村 正明	警察庁警備局警備課	603
32	上村 千城	海上保安庁警備救難部防災課	505
33	勘木和香子	海上保安庁警備救難部救難課	406
34	河内 智之	自治省消防庁救急救助課	605
35	設楽 清	外務省経済協力局国際緊急援助室	501
36	小森 毅	国際協力事業団国際緊急援助隊事務局管理課	502
37	関 徹男	国際協力事業団国際緊急援助隊事務局業務課	601
38	中村 俊介	財) 国際協力サービスセンター開発部開発業務課	503
39	上野 貞信	財) 国際協力サービスセンター開発部開発業務課	602
40	奥山 亮子	財) 国際協力サービスセンター開発部開発業務課	401
41	淵上いさ子	財) 国際協力サービスセンター開発部開発業務課	403
42	松谷 曜子	国際協力出版会	405

## 国際緊急援助隊（救助チーム）第4回機材習熟訓練

### ①対象機器リスト

- ・エアージャッキ
- ・アークエアー
- ・空気呼吸器
- ・地中音響探知機
- ・熱画像直視装置
- ・削岩機
- ・ルーカスレスキューツール
- ・エアーカッター
- ・ファイバースコープ
- ・コンプレッサー
- ・エンジンカッター
- ・エアソー
- ・チルホール
- ・投光器
- ・ガス検知器
- ・可燃性ガス警報器
- ・酸素警報器

### ②展示機器リスト

- ・インマルサット（可搬型海事衛星地球局）
- ・浄水器
- ・道具箱（木箱）
- ・生活用機材（ジュラルミンケース）
- ・重箱型収納ケース（ガス検知器、可燃性ガス警報器、酸素警報器）

第5回国際緊急援助隊救助チーム資機材習熟訓練プログラム  
10月14日(水)～16日(金)

月日	時 間	プ ロ グ ラ ム	会 場
10 月 14 日 (水)	13:00	国際協力事業団(第8会議室:8階)集合 <受付・研修会費徴収>	JICA: 第8会議室
	13:15	<国際緊急援助局長挨拶> <オブザーバー・事務局紹介>	
	14:00-	新宿(三井ビル)発 (移動の車中において自己紹介及びビデオ数種上映)	
	-17:00	鹿沼着	
	17:10-	オリエンテーション 国際協力事業団事業概要説明 国際緊急援助体制概要説明 共通資機材について	A 会 場
	-18:45 19:00--20:00 20:00-	熱画像直視装置等使用説明 夕 食 各庁別連絡会	食 堂 A 会 場 他
15 日 (木)	07:30--08:00	朝 食	食 堂
	08:15	集 合	ホテル玄関前
	08:30--09:00	習熟訓練方法説明	B 会 場
	09:00--12:00	習熟訓練(グループ別)	〃
	12:00--13:30	昼食、休憩	食 堂
	13:30--16:30	習熟訓練(グループ別)	B 会 場
16:30--17:30	レポート作成	A 会 場	
18:30--21:00	懇親会	ホテル2階	
16 日 (金)	08:00--	朝 食	食 堂
	09:00--10:00	総括・閉会	A 会 場
	10:30	鹿沼発	
	13:30	新宿駅西口解散(東京駅経由)	

注) A会場(ホテル京屋内)  
B会場(帝国繊維鹿沼工場内)  
食堂(ホテル京屋内)

## 第5回機材習熟訓練参加者名簿

### 1. 受講者

No	氏名	所 属 先	列-フ	部 屋
1	佐藤 健一	〈警〉 北海道警察本部警備部機動隊	A	606
2	安藤 喜万	〃 警視庁警備部特科車両隊	A	606
3	橋本 久幸	〃 警視庁警備部第四機動隊	B	607
4	水澤 敏雄	〃 埼玉県警察本部警備部機動隊	C	608
5	秋本 剛	〃 神奈川県警察本部警備部第一機動隊	C	608
6	鈴木 隆	〃 愛知県警察本部警備部機動隊	D	706
7	白敷 秀樹	〃 京都府警察本部警備部機動隊	D	706
8	羽間 靖志	〃 大阪府警察本部警備部第二機動隊	E	707
9	櫻井 利郎	〃 兵庫県警察本部警備部機動隊	E	707
10	益田 敬二	〃 福岡県警察本部警備部第二機動隊	B	607
11	紙岡 英男	〈海〉 釧路海上保安部「巡視船りしり」	A	407
12	大嶋 敏浩	〃 塩釜海上保安部「巡視船おじか」	B	408
13	佐々木誠志	〃 羽田特殊救難基地	C	410
14	永家 邦幸	〃 羽田特殊救難基地	D	411
15	山下浩一郎	〃 横浜海上保安部「巡視船のじま」	E	411
16	大井 良司	〃 田辺海上保安部「巡視船みなべ」	A	407
17	加納 泰正	〃 呉海上保安部「巡視船みささ」	B	408
18	山下 敏幸	〃 福岡海上保安部「巡視船げんかい」	C	410
19	廣瀬 隆司	〃 境海上保安部巡視船「おき」	D	411
20	谷山 繁隆	〃 新潟海上保安部「巡視船やひこ」	E	411
21	星山 賢治	〈消〉 新潟市消防局	A	510
22	村瀬 優	〃 岐阜市消防本部	B	510
23	前川 士朗	〃 浜松市消防本部	C	506
24	武本 半次	〃 東大阪市消防本部	D	507
25	佐藤 浩二	〃 西宮市消防局	E	508
26	山地 一暢	〃 倉敷市消防局	A	510
27	濱田 信孝	〃 福山地区消防局	B	510
28	濱田 広治	〃 下関地区広域行政事務組合消防本部	C	506
29	藤田 伸幸	〃 高松市消防局	D	507
30	山口 靖彦	〃 佐世保市消防局	E	508



2. オブザーバー及び事務局

No	氏名	所属先		部屋
31	小橋 克己	オブザーバー	警察庁警備局警備課	603
32	上村 正明	〃	警察庁警備局警備課	605
33	渡部 典正	〃	海上保安庁総務部教養管理官	405
34	末吉 安典	〃	海上保安庁装備技術部管理課	406
35	山崎 昇	〃	自治省消防庁救急救助課	503
36	石川 節雄	〃	自治省消防庁救急救助課	—
37	下枝 昌司	〃	自治省消防庁救急救助課	505
38	西田 義弘	事務局	国際協力事業団国際緊急援助隊事務局管理課	501
39	古屋 年章	〃	国際協力事業団国際緊急援助隊事務局業務課	502
40	木村 聡	〃	国際協力事業団国際緊急援助隊事務局業務課	601
41	河野 嘉仁	〃	財) 国際協力サービスセンター開発部開発業務課	403
42	奥山 亮子	〃	財) 国際協力サービスセンター開発部開発業務課	401
43	上野 貞信	〃	財) 国際協力サービスセンター開発部開発業務課	602

## 国際緊急援助隊（救助チーム）第5回機材習熟訓練

### ①対象機器リスト

- ・ エアージャッキ
- ・ アークエアー
- ・ 空気呼吸器
- ・ 地中音響探知機
- ・ 熱画像直視装置
- ・ 削岩機
- ・ ルーカスレスキューツール
- ・ エアーカッター
- ・ ファイバースコープ
- ・ コンプレッサー
- ・ エンジンカッター
- ・ エアソー
- ・ チルホール
- ・ 投光器
- ・ ガス検知器
- ・ 可燃性ガス警報器
- ・ 酸素警報器

### ②展示機器リスト

- ・ インマルサット（可搬型海事衛星地球局）
- ・ 浄水器
- ・ 道具箱（木箱）
- ・ 生活用機材（ジュラルミンケース）
- ・ 重箱型収納ケース（ガス検知器、可燃性ガス警報器、酸素警報器）





(4) J D R 救助チーム・リーダー研修会



第4回国際緊急援助隊（救助チーム）リーダー研修プログラム

月日	時間	プログラム	備考
第 1 日  6 月 25 日  (木)	09:00	受付開始	
	09:30～10:00	開会式 開会の挨拶 オリエンテーション 講師、オブザーバー等紹介	
	10:00～10:50	国際協力事業団の事業説明（併せビデオ上映）	
	10:50～11:40	国際緊急援助体制概要（発足の経緯、概要、法律、実績）及び実施体制の説明（併せビデオ上映）	
	11:40～12:00	コーヒープレイク	
	12:00～12:40	災害援助関連ビデオの上映（メキシコ地震、コロンビア火山噴火）	
	12:40～13:50	昼食	
	13:50～14:35	グルーピング（自己紹介）	
	14:35～14:50	シミュレーション方式の説明、導入	
	14:50～16:50	セッション1	
	16:50～17:10	質疑応答	
	17:10～17:50	講義「個人衛生について」	
	18:00～20:00	懇親会	
第 2 日  6 月 26 日  (金)	09:00～11:00	セッション2	
	11:00～11:30	質疑応答	
	11:30～12:30	講義「プロトコールとエチケットについて」	
	12:30～13:45	昼食	
	13:45～15:05	国際緊急援助隊派遣体験談 ① 13:45～14:25 ② 14:25～15:05	
	15:05～15:20	コーヒープレイク	
	15:20～16:00	講義「医療チームとの連携について」	
	16:00～16:30	総合討論	
	16:30～16:45	アンケート記入	
	16:45～17:00	講評、修了式	
17:00	解散		

第4回国際緊急援助隊救助チームリーダー研修参加者名簿

1. 受講者

No	氏名	所属先		グループ
1	江口 康夫	〈警〉	北海道警察本部機動隊	A
2	小山田典明	〃	埼玉県警察本部機動隊	B
3	軍司 敏昭	〃	警視庁第八機動隊	B
4	小野 文男	〃	警視庁第九機動隊	C
5	大久保敏洋	〃	神奈川県警察本部第二機動隊	C
6	岩城 一平	〃	愛知県警察本部機動隊	D
7	岩田 孝夫	〃	大阪府警察本部第二機動隊	E
8	楠田 久二	〃	京都府警察本部機動隊	D
9	樋口 正和	〃	兵庫県警察本部機動隊	E
10	原口 弘雅	〃	福岡県警察本部第一機動隊	A
11	五井 豊	〈海〉	千歳航空基地	A
12	大久保隆洋	〃	羽田特殊救難基地	A
13	東城 英雄	〃	羽田特殊救難基地	B
14	石川 弘一	〃	横浜海上保安部巡視船「やしま」	C
15	長崎 克明	〃	横浜海上保安部巡視船「のじま」	D
16	高橋 正一	〃	羽田航空基地	E
17	鳥越 義弘	〃	名古屋海上保安部巡視船「みずほ」	B
18	武田 治	〃	福岡海上保安部巡視船「げんかい」	C
19	中村 耕一	〃	新潟海上保安部巡視船「えちご」	E
20	三角 資嗣	〃	那覇航空基地	D
21	加藤 静夫	〈消〉	東京消防庁警防部救助課	A
22	稲田 勝人	〃	横浜市瀬谷消防署	B
23	岸田 明彦	〃	川崎市臨港消防署	C
24	田中 整治	〃	名古屋市消防救助隊	D
25	倉田 容	〃	京都市消防局警防部救急救助課	E
26	三宅 靖衛	〃	大阪市消防局警防部救急救助課	A
27	新免 經由	〃	神戸市消防局警防部救助課	B
28	沖貞 幸利	〃	広島市佐伯消防署	C
29	山本 敏明	〃	北九州市小倉南消防署	D
30	富永 貞幸	〃	福岡市博多消防署	E



## 2. 講師

No	氏名	所属先
31	今川 八束	麻布大学環境保健部環境微生物教室教授
32	山本 保博	日本医科大学付属多摩永山病院救命救急センター
33	古積 俊孝	警視庁警備部警衛課
34	鈴木 明夫	警視庁警備部災害対策課
35	高橋 智章	東京消防庁警防部救助課
36	白山 明子	外務省大臣官房儀典官室

## 3. オブザーバー及び事務局

No	氏名	所属先
37	小橋 克己	警察庁警備局警備課
38	上村 正明	警察庁警備局警備課
39	宇出津弘昭	海上保安庁総務部国際課
40	大和 秀一	海上保安庁警備救難部救難課
41	山崎 昇	自治省消防庁救急救助課
42	設楽 清	外務省経済協力局国際緊急援助室
43	亀井 啓次	外務省経済協力局国際緊急援助室
44	小野 睦一	国際協力事業団国際緊急援助隊事務局
45	小森 毅	国際協力事業団国際緊急援助隊事務局管理課
46	算 克彦	国際協力事業団国際緊急援助隊事務局業務課
47	関 徹男	国際協力事業団国際緊急援助隊事務局業務課
48	古川 光明	国際協力事業団国際緊急援助隊事務局業務課
49	奥山 亮子	財)国際協力サービスセンター開発部開発業務課
50	熊田 恵子	財)国際協力サービスセンター開発部開発業務課
51	上野 貞信	財)国際協力サービスセンター開発部開発業務課
52	淵上いさ子	財)国際協力サービスセンター開発部開発業務課
53	芝口 敬子	財)国際協力サービスセンター開発部開発業務課
54	松谷 曜子	国際協力出版会

# フィリピン地震災害

シミュレーション方式による設問討議

第4回国際緊急援助隊（JDR）救助チームリーダー研修

（平成4年6月25日～同年6月26日）

## 1. 災害の概要

1990年7月16日16時26分（現地時間）フィリピン共和国ルソン島中部ヌエバエハシ州を震源地とするマグニチュード7.7の地震が発生、同州カバナツァン市および山間避暑地バギオ市を中心としたルソン島中部全域で多大な人的、物的被害をもたらした。

## 2. 被害状況

### ①人的被害

死 者	約 1,700人
負 傷 者	約 3,600人
行方不明者	約 800人
被 災 者	約 1,594,000人

### ②物的被害

建物の損壊	71,702戸
-------	---------

## 3. フィリピン政府の対応

マカライグ官房長官は日本国駐フィリピン大使に対して7月17日未明、食料、医薬品の供与、資金援助等、あらゆる支援を戴きたく、是非とも宜しく願いたい旨、要請越した。アキノ大統領は7月16日バギオ市及びダグバン市の被害状況を視察し、既に支出を決定している140百万ペソに加え、救出活動促進のため22.4百万ペソの支出を新たに決定した。

## 4. 他国援助機関の対応

駐「フィ」米軍  
他

## 5. 国際緊急援助隊の派遣

7月17日（火）午前9時、外務省は今次災害による被災者救済のため以下の日程で国際緊急援助隊救助チーム、医療チーム総勢43名の派遣を決定し、関係機関へ通報した。

### ①人員構成

・ 団長（外務省）	1名
・ 救助チーム	
警 察	: 11名（内警察庁1名）
海上保安庁	: 11名（内海上保安庁本庁1名）
消 防	: 11名（内自治省消防庁1名）
・ 医療チーム	
医 師	2名
看 護 婦	4名
医療調整員	2名
業務調整員（JICA）	1名

②救助チーム活動用携行機材  
別添1のとおり

派遣日程

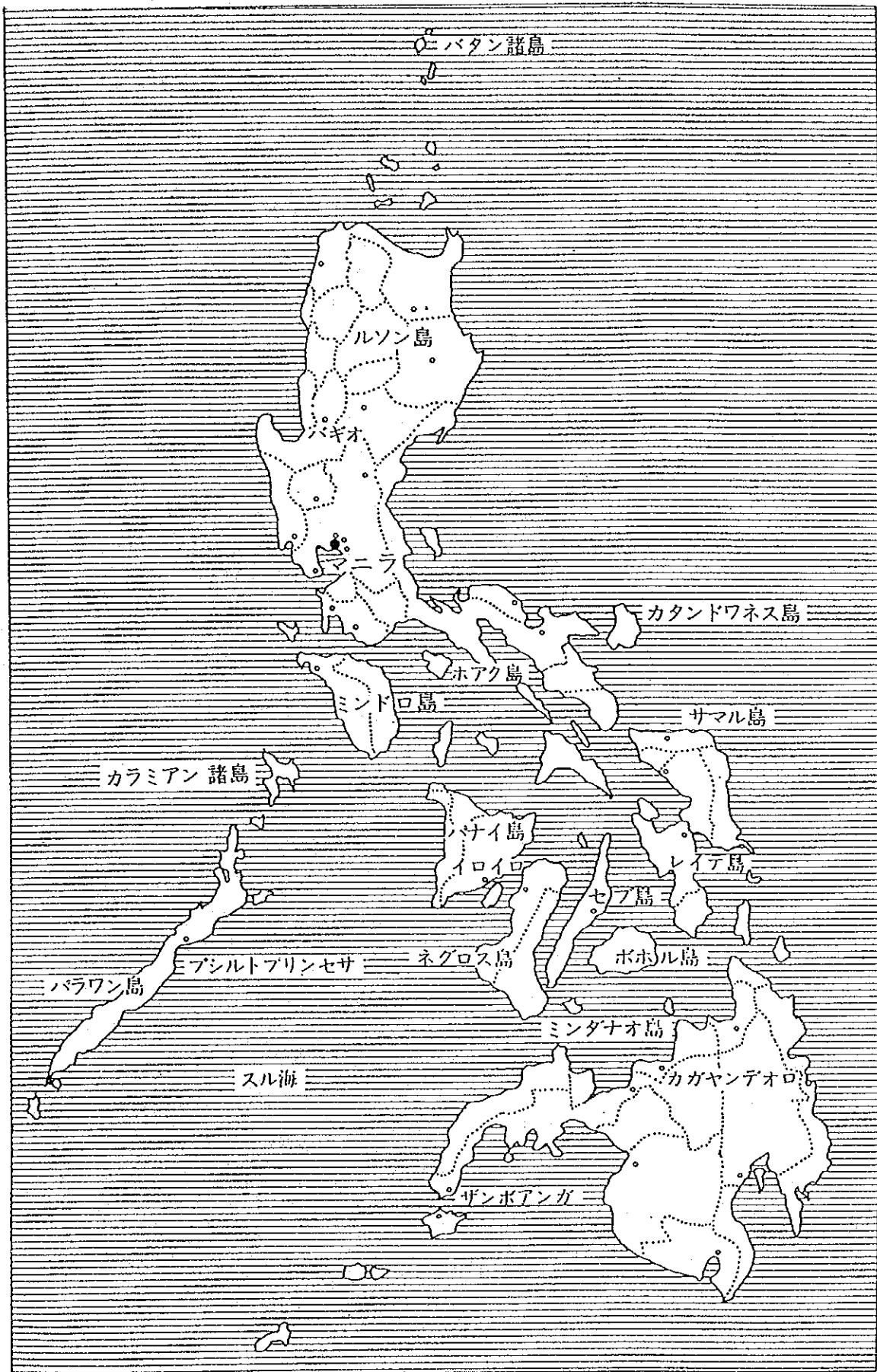
(往路) 7月17日	成 田 発	19:00
	マニラ 着	23:20
(復路) 7月27日	マニラ 発	08:00
	成 田 着	12:15

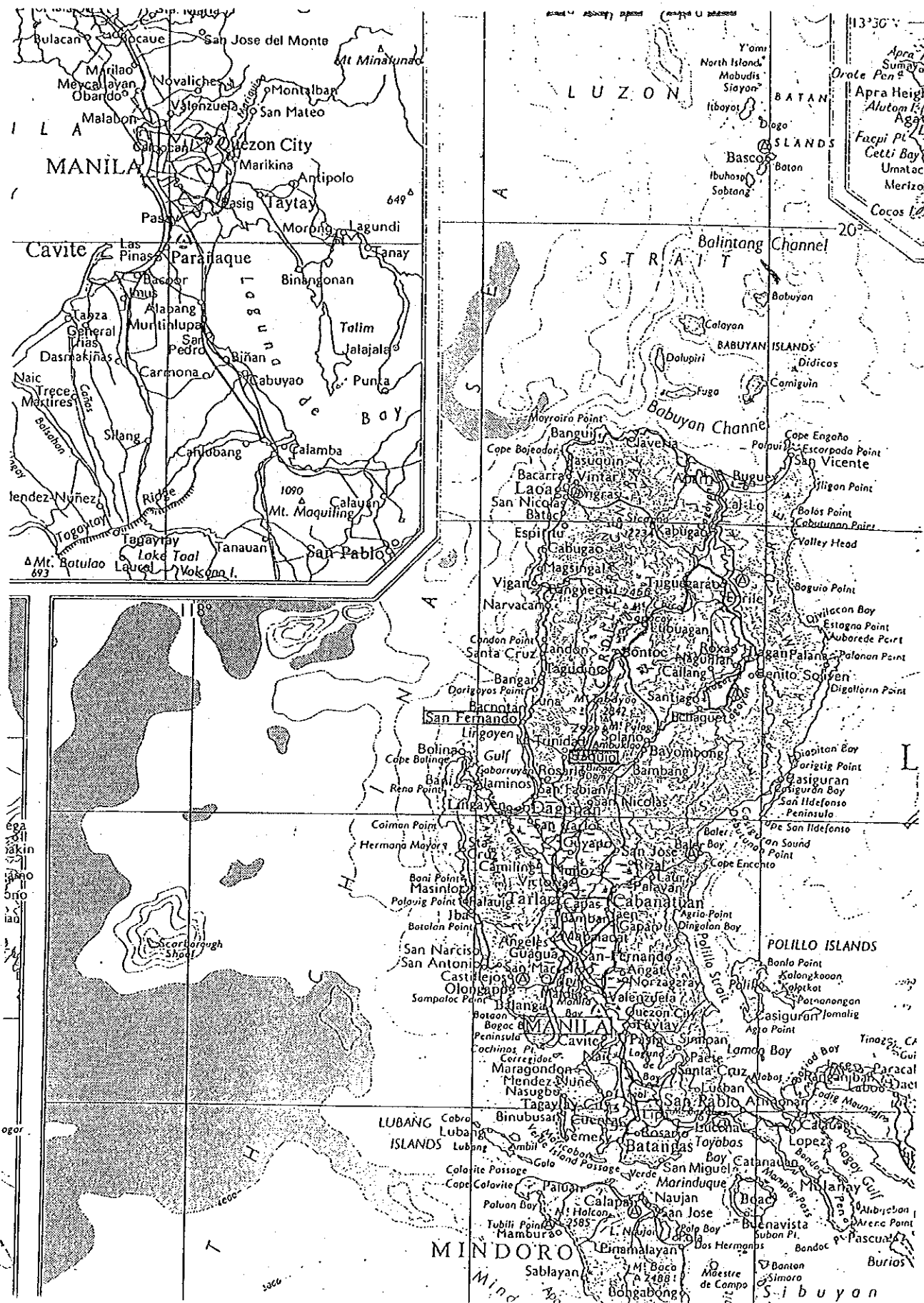
6. あなたは国際緊急援助隊(JDR)の一員としてマニラに向かう機上の人となりました。

分類	No	品名	数量	用途
個人 装 備 器 材	1	水筒	33	
	2	寝袋	33	
	3	防塵メガネ	33	破壊工作時の教員の眼保護
	4	リュックサック	33	救助用小機材運搬
	5	皮手	200	破壊工作時隊員が装着
	6	(防塵) マスク	600	〃
	7	ゴム手袋	600	救出作業時の感染症対策用
	8	懐中電灯	33	
	9	懐中電灯用電池	180	
	10	スコップ	33	掘削用(1人1本)
	11	軍手	330	作業時に於ける手の保護(1人10双)
活 動	12	鉄線鉄	3	鉄線切断
	13	大ハンマー	3	破壊用
	14	万能おの	3	〃
	15	つるはし	6	〃
	16	パイプレンチ	6	〃
	17	ベンチ	6	〃
	18	救助用担架	6	吊り下げ・搬送兼用
	19	サーバイバースリング	6	吊り下げ作業時に被救助者の身体に装着
	20	救助用ロープ(100m)	10	救出用
		(50m)	10	〃
		(30m)	10	〃
資 機	21	小綱	60	〃
	22	カラビナ	60	救助用ザイルと人体もしくは担架等との結首
	23	滑車	30	ザイル等を利用した引き上げ活動時支点
	24	単はしご	2	高所等への昇降用
	25	ワイヤーはしご	2	〃
	26	燃料携行缶	6	救助用機材の補助燃料
	27	携帯メガホン	4	拡声用
	28	携帯メガホン予備電池	80	
	29	夜間用双眼鏡	1	暗闇においての搜索活動
	30	レスキューツール	2	破壊(ドアこじあけ等)
	31	削岩機	6	破壊
材	32	エアージャッキ	2	被救助者を圧迫している岩塊等の起重
	33	熱画像直視装置	1	赤外線を利用した被救助者搜索装置
	34	移動式コンプレッサー	1	空気利用機材の補助
	35	発電機のアダプター	12	
	36	エンジンカッター	6	破壊・切断用
	37	アークエア電気溶断器	1	切断用
	38	チルホール(ウィンチ)	2	倒壊物の起重
	39	エアーカーター	3	切断用
	40	エアソー	3	〃
	41	ショックパッド	10	機材の損傷保護
	42	投光器	6	夜間活動用照明
43	ファイバースコープ	2		
44	地中音響探知機	1		
45	大おの	6	切断、破壊用(各小隊ごと)	
46	のこぎり	6	切断用(各小隊ごと)	
47	縛帯	6	被災者を救助する際の(特にヘリコプターにて)吊上げ・吊下げ用ベルト(各小隊ごと)	
48	ガス検知器	2	有毒ガス及び酸素濃度測定・検知(2個班で使用)	
49	可燃性ガス警報器	6	(各小隊ごと)	
50	酸素警報器	6	(各小隊ごと)	
51	空気呼吸器	33	(1人1器)	
52	空気ポンベ(上記呼吸器用)	65	(スベア5を含む)	
53	エンジンチェーンソー	4	木材の切断用	

分類	No	品名	数量	使 途
活動 資 機 材	54	ドアオーブナー	6	ドア等の破壊、救出口の拡張用 (各小隊ごと)
	55	レスキューツール	各 2	ドア等の破壊、救出口の拡張用
	56	大型ボール	6	ドア等の破壊、救出口の拡張用 (各小隊ごと)
	57	当て板	各10	救出口確保及び機材損傷保護 (2個班で各5)
	58	携帯無線機	15	現場に於ける各小隊間の交信用
	59	携帯無線機予備バッテリー	50	各無線機に3つ、予備5つ
水難 救 助 用 資 機 材	60	救命胴衣	33	隊員の安全確保 (1人1着)
	61	救命浮環	2	救助者用
	62	水中ライト	3	
	63	ゴムボート	3	
	64	船外機	3	
	65	空気ポンペ	33	潜水作業用
	66	救命索発射器	2	離れた場所から救命索を渡して遭難者を救助する。
記 録 用	67	ビデオカメラ (8 mm)	3	(2小隊に1)
	68	ビデオカメラバッテリー	3	
	69	ビデオテープ (8 mm)	30	
	70	充電器 (ビデオカメラ用)	3	
	71	カメラ	3	(2小隊に1)
そ の 他	72	キャップライト	33	夜間或るいは暗間での活動用 (1人1つ)
	73	ケブラー手袋	66	手の保護 (1人2双)
	74	アークエア-用バッテリー	1	
	75	酸素ガス移充填コネクター	6	
	76	A7-7- 用空気ポンペ (20ℓ)	6	
	77	〃 替刃	各 150	
	78	酸素呼吸器	4	救出者が衰弱している場合の酸素吸入用
	79	〃 用ポンペ (1.5ℓ)	20	酸素呼吸器1機に5本必要
	80	A7-コンパッサー (インジ付)	1	空気ポンペ充填用

フィリピン







# I. 概 況

1) 正式国名	フィリピン共和国(Republic of the Philippines)																																							
2) 独立年月日	1946年 7月 4日 <旧宗主国> アメリカ																																							
3) 政 体	立憲共和制 <元首の名称> コラソン・アキノ (Corazon AQUINO)大統領																																							
4) 面 積	約 300千平方キロメートル (日本の約80%) (注1)																																							
5) 首 都	マニラ (メトロ・マニラー約 783万人、1990年) (注2)																																							
6) 気 候	<p>全土が熱帯気候で年中高温で多雨である。</p> <p style="text-align: center;">図-1 マニラにおける平均気温・降水量</p> <table border="1" style="margin: 0 auto; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <thead> <tr> <th>月</th> <th>1</th> <th>2</th> <th>3</th> <th>4</th> <th>5</th> <th>6</th> <th>7</th> <th>8</th> <th>9</th> <th>10</th> <th>11</th> <th>12</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>平均気温</td> <td>25.3</td> <td>26.0</td> <td>27.4</td> <td>28.9</td> <td>29.4</td> <td>28.4</td> <td>27.7</td> <td>27.3</td> <td>27.5</td> <td>27.2</td> <td>26.5</td> <td>25.7</td> </tr> <tr> <td>降水量</td> <td>14.3</td> <td>5.0</td> <td>6.6</td> <td>14.8</td> <td>122.0</td> <td>249.6</td> <td>343.5</td> <td>434.8</td> <td>317.0</td> <td>190.5</td> <td>126.8</td> <td>60.2</td> </tr> </tbody> </table> <p style="text-align: center;">出典 『世界各国要覧』1990</p>	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	平均気温	25.3	26.0	27.4	28.9	29.4	28.4	27.7	27.3	27.5	27.2	26.5	25.7	降水量	14.3	5.0	6.6	14.8	122.0	249.6	343.5	434.8	317.0	190.5	126.8	60.2
月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12																												
平均気温	25.3	26.0	27.4	28.9	29.4	28.4	27.7	27.3	27.5	27.2	26.5	25.7																												
降水量	14.3	5.0	6.6	14.8	122.0	249.6	343.5	434.8	317.0	190.5	126.8	60.2																												
7) 人 口	<p>&lt;総人口&gt; 約 6,047万人 (1990年) (注2)</p> <p>&lt;人口成長率&gt; 2.5% (1980~1989年) (注1)</p> <p>&lt;平均寿命&gt; 男 62歳 女 66歳 (1989年) (注1)</p> <p style="text-align: center;">図-2 フィリピンの人口</p> <p style="text-align: center;">出典 World Development Report 1980~1991 『世界人口年鑑』1980~1991</p>																																							

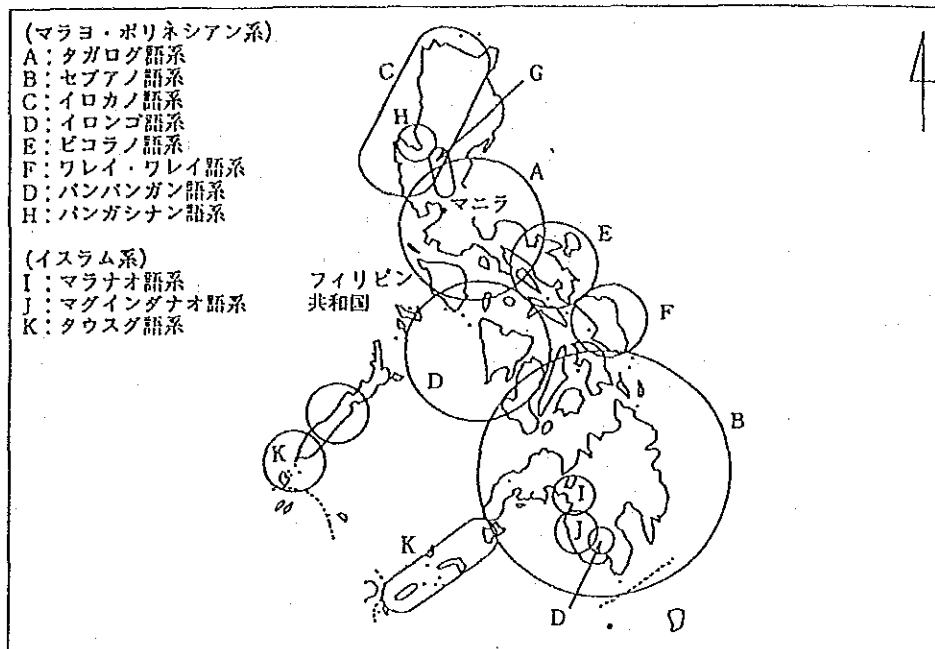
8) 言

語

<公用語> ピリピノ語、英語

タガログ語を基本とするピリピノ語を共通の国語とする。

図-3 言語



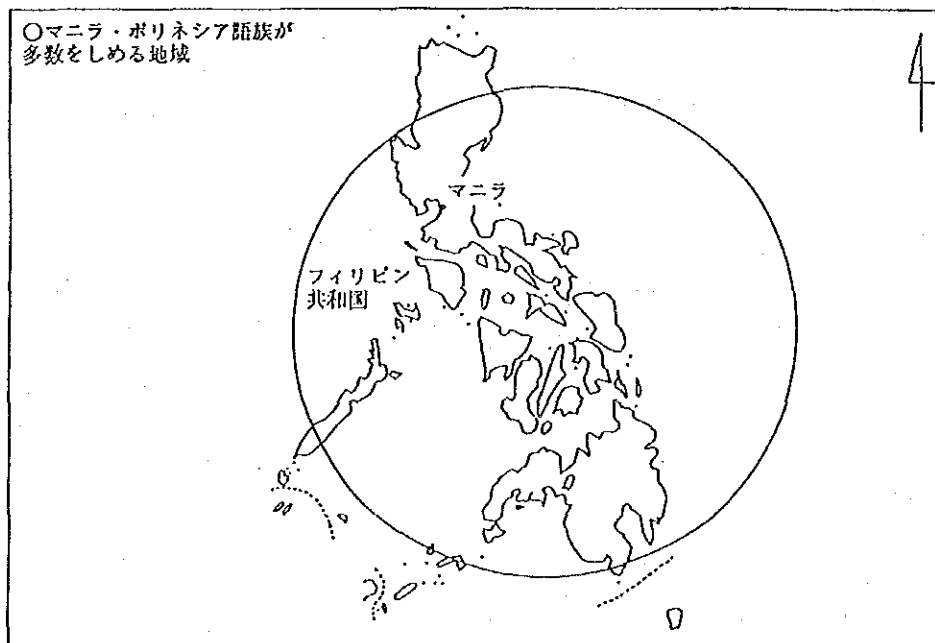
出典 Atlas of Southeast Asia 1989

9) 民

族

原住民は有史以前に中央アジアから渡来したと言われるネグリート族で、現在は山岳地中心に多くの少数民族に分かれて住んでいる。13世紀頃までにマレイ系種族が渡来し、彼らが現フィリピン人の多数を占める。

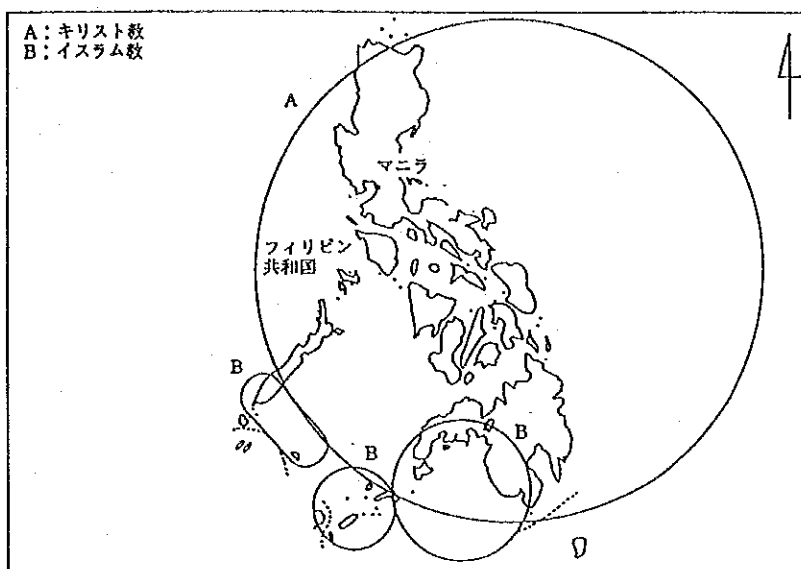
図-4 民族



出典 Atlas of Southeast Asia 1989

10) 宗 教	長くスペイン統治下にあったため、国民の85%がカトリック教徒である。
---------	------------------------------------

図-5 宗 教



出典 Atlas of Southeast Asia 1989

11) 文 化	スペイン統治以前のマラヤ文化、16世紀後半からのスペイン文化の影響、更にアメリカ文化の流入を受け、混合された文化を形成しているが、最近強まりつつあるナショナリズムを反映してフィリピン文化に民族的性格を強化しようとする傾向も見られる。
12) 教 育	<p>&lt;義務教育&gt; 7～13歳までの6年間 (注3)</p> <p>&lt;就学率&gt; (標準就学年齢人口に対する総就学者の比率)</p> <p>初等教育: 110% (1988年) (注1)</p> <p>中等教育: 71% (1988年) (注1)</p> <p>高等教育: 28% (1988年) (注1)</p> <p>&lt;識字率&gt; 86% (1985年) (注1)</p>
13) 保 健・医 療	<p>&lt;医師一人当たりの人口&gt; 6,570人 (1984年) (注1)</p> <p>&lt;看護人一人当たりの人口&gt; 2,680人 (1984年) (注1)</p> <p>熱帯気候のため経口伝染病(コレラ、腸チフス、赤痢、伝染性肝炎、ポリオなど)が広範に見られ、マラリアなど蚊媒介の感染症も流行している。</p>
14) 通 貨	ペソ (1ペソ=5.14円) (1992年3月2日現在) (注4)
15) 会 計 年 度	1月1日 ~ 12月31日
16) 略 史	<p>1521年 マゼラン、セブ島に上陸</p> <p>1571年 スペイン統治の開始</p> <p>1898年 アギナルドの反乱と独立宣言</p> <p>1899年 米西戦争の結果、米のフィリピン統治が始まる</p> <p>1943年 日本の軍政下に入る</p> <p>1946年 フィリピン共和国樹立</p> <p>1962年 マルコス政権誕生</p> <p>1986年 アキノ政権発足</p>

17) 政 治	<p>&lt;内政&gt;1986年に就任したアキノ大統領は、政権誕生時の民衆からの支援を背景に前政権末期の経済的混乱の解決を図るべく87年に「中期開発計画」(1987～92)、90年に「中期公共投資計画」(1990～94)を策定し、諸施策を実施してきたが、90年の地震、台風、旱魃等の自然災害、湾岸戦争による経済的打撃(原油価格高騰によるインフレ、海外送金の減少)、更には91年6月のピナトッポ山大噴火による被害など様々な障害により、政策の効果的な実施を妨げられている。なお、両計画における課題は、①貧困の緩和②生産的雇用機会の創出③平等と社会的公正の確立及び推進④持続的経済成長の達成、である。</p> <p>&lt;外交&gt;対米関係を機軸としつつ、すべての諸国との友好関係を推進している。アジア諸国特に日本、アセアン諸国との関係促進を図るとともに、中国、旧ソ連などの共産圏とも友好関係を有している。経済協力の面では日米のみならずEC、独、豪州との関係も着実に進展している。また懸案となっている在比米軍基地協定の扱いについては、議会の反対があり難航しているが、比政府としては存続したい意向である。</p>
18) 軍 事	<p>&lt;国防予算&gt; 10億 5,200万ドル (1990年)          &lt;兵 役&gt; 志願制          &lt;総兵力&gt; 現 役: 108,500 人          (陸軍 6.8万人 海軍 2.5万人 空軍 1.55 万人)          予備役: 128,000人 (注5)</p>
19) 我が国との協定	<p>1956年 5月 9日 賠償協定          1958年 7月24日 入国滞在取極          1966年 2月15日 青年海外協力隊派遣取極          1968年 6月26日 郵便為替約定          1970年 1月20日 航空協定          1979年 5月10日 友好通商航海条約          1980年 2月13日 租税条約          1980年 3月24日 小包郵便約定</p>
<p>20) 援助要請のための国内手続き</p> <p>①一般無償資金協力・食糧増産援助</p> <pre>         graph LR             A[各実施機関] --&gt; B[国家経済開発庁]             B --&gt; C[NEDA外国援助部]             C --&gt; D[外務省]             D --&gt; E[各国大使館]             C --&gt; F[NEDA公共事業部]         </pre> <p>②文化無償</p> <pre>         graph LR             A[各実施機関] --&gt; B[外務省]             B --&gt; C[各国大使館]         </pre> <p>③技術協力</p> <pre>         graph LR             A[各実施機関] --&gt; B[N E D A]             B --&gt; C[各国大使館]         </pre> <p>※これまで実施機関は中央官庁であったが、地方化政策により1992年からは地方自治体も外国の援助要請を提出できるようになる。</p>	

- 出典 (注1) World Development Report 1991 The World Bank  
 (注2) 「国別援助実施指針」 1992 国際協力事業団資料  
 (注3) 「ユネスコ文化統計年鑑」 1989 原書房  
 (注4) 東京銀行調べ  
 (注5) 『ミクラー・バランス 1990-1991』 1991 メイナード出版

# フィリピン—政治、社会、経済概況

## 1. 内 政

### 概観

アキノ政権は86年2月、新たな民主的政治体制の整備、反政府勢力への対処、経済の再建を課題としてスタートした。しかし成立以来、権力基盤が脆弱で常に左右両極の政治勢力からの揺さぶりに直面し、また、政権内部における強い確執（左派對実務派、左派對軍部）や頻発するNPA（新人民軍）のテロと軍部によるクーデター未遂事件といった不安定要因を抱えていたが、閣僚の更迭などを通じての政治基盤の右シフト及び共産勢力との強い対決姿勢への転換により、かかる困難な状況を一応克服した。更に軍人の昇給等待遇改善、ラモス氏の国防長官就任などにより軍に対するグリップ強化を図ったが、89年12月の国軍の一部による大規模なクーデター未遂事件により、同政権の軍に対する支配力の弱さ、その背景にある経済・社会問題を露呈することとなった。その後90年7月の大地震、8月以降の中東情勢の変化、10月のミンダナオ島反乱事件などにより、フィリピンの政治・経済情勢はますます困難な局面にさしかかってきた。

### 民主的政治体制の整備

新憲法の制定、新議会の設置、国政・地方選挙の実施等の整備は完了した。1990年末現在、議会は与党が絶対優位である（上院23人のうち22人、下院197人のうち174人が与党）。アキノ大統領の支持母体はLDP（民主フィリピンの戦い）である。

### 反政府勢力への対処

共産勢力は87年をピークに減少傾向にある。88年、89年と軍は共産党幹部を続々と逮捕し、共産勢力はかなりの打撃を受けたといわれる。

一方回教徒ゲリラの勢力は2万4千人余りといわれる。回教徒は主にミンダナオ西部、スルー諸島などに集中しており、モロ民族解放戦線（MNLF）等の過激派は、ミンダナオ地域の完全自治を要求している。

また国軍不満分子の動きは、89年12月のクーデター未遂事件でも明らかなように、組織的で資金も潤沢なだけに予断を許さない。

## 2. 外 交

### 外交政策の概要

アキノ政権は基本的には、ASEAN、米国、日本等自由主義諸国との関係を重視しつつ、経済協力、債務繰延、フィリピンへの投資増加等経済再建への協力を期待している。特に対米関係は、歴史的、文化的背景もあり、フィリピンの対外関係の圧倒的比重を占める。米国もアキノ政権支持への立場を表明している。

### 国防

#### ①軍事力

国防予算は約10.5億ドル（1990年）で、国家の予算の9.3%にあたる。兵役は志願制で、陸軍6.8万人、海軍2.5万人、空軍1.6万人、警察軍4.5万人であるが、新憲法の下では、警察組織が再編され、警察軍は統廃合されることになる。

#### ②基本方針

国軍の主要任務は共産ゲリラ対策等国内の治安維持であり、対外的安全保障は米国に依存している。米比間には3つの軍事取り決め（軍事基地協定、軍事援助協定、相互防衛条約）が存在する。

設問1

<設定> JDR一行はマニラ宿泊後早朝のフィリピン空軍の輸送機で経由地であるサンフェルナンド（バギオまで直線距離にして約45Km）まで移動しました。

・サンフェルナンドから被災地であるバギオに入るに際し、フィリピン政府の用意したヘリコプターの搭乗数が限られ、3分の1ずつしか乗ることが出来ない場合、搭乗順序についてどう考えますか。

- ① 通常チームは被災地に到着するまで、その詳細な被災状況、明確なニーズの把握が困難である。
- ② このためチームは被災地においてまず被災国政府のしかるべき機関（災害対策本部等）との活動計画策定の為の調整（打合せ）会議を実施することが重要となる。
- ③ 故に全員が同じ行動をとることが不可能となった場合には、会議に出席すべきメンバーとして、団長、救助チーム及び医療チーム総括官を第1陣として被災地入りさせることが基本と考えられる。

設問2

災害対策本部からJDRの活動場所を指定されましたが、既に外国救助チームが活動中です。どのような点に留意して、救助活動計画の立案、調整を行いますか。

- ① 他国との救助チームとの連携、調整の重要性を認知させる設問である。
- ② この場合、まず既に活動中の他国救助チームの活動方針、活動範囲、進捗状況を把握するとともに日本側チームの活動能力（人員、機械）の説明を行う。
- ③ このような打合せの場には、必ず被災国側の担当官等しかるべき役職の人の同席を依頼するよう心掛ける。

設問3

地震により崩壊した病院内の患者等の救出において、比較的被害の少なかった伝染病棟からの被災者救出が残りました。どのような点に留意して、活動に着手しますか。

- ① 隊員の感染の危険回避を最重要として考える。
- ② 伝染病棟に関する情報（収容されている伝染症患者、伝染病棟の構造、設置等）の収集及び危険性評価を行う。
- ③ 活動計画立案に際しては医療チーム医師の指示を仰ぐ。
- ④ 救出後の搬送先の確保も必ず事前に特定する。

設問4

(1) 災害対策本部で各国救助隊との調整会議が開催され、その席上A国救助隊から是非ともJDRの重要機器を貸して欲しい旨の要請を受けました。どう対処しますか。

- ① 資機材の貸借については様々な問題が生ずることも考えられ、慎重に対応するよう心掛けたい。
- ② やむを得ず長期的に貸し出す場合には、出来れば「借用願」を发出させることが最良と思われるが入手困難な場合は「受領書」を作り、借り出した人間の身許（氏名、所属チーム、連絡先等）を明らかにしておく。
- ③ 必ず団長、JICA調整員に事前に諒解を取りつけるようにする。
- ④ 貸し出しにあたっては、相手側レベルを見極め、場合によっては使用に熟知した者をつける等の対応をする。

(2) 活動2日目JDRの携行機材の一部が盗難されるという不慮の事態に遭遇しました。どう対処しますか。

- ① 団長、JICA調整員等に報告する。
- ② 災害対策本部へ通報するとともに、関係機関へ搜索の依頼を行なう。
- ③ 盗難届等公式な書類を入手し、帰国後JICAに提出。
- ④ 必要性の高い資機材の場合は、他チームからの借用も含め現地調達の方法を検討する。

設問5

災害発生後、相当の時間が経過して生存者発見の可能性がなくなってきたが、現地政府から引き続き活動を行うよう要請を受けました。当初の撤退期日が迫り、わがチームとしては撤退する方針でいます。(1) 撤退時期を決めるにあたって、どのようなことに留意しますか。

- ① 援助隊の活動の原則はあくまで「要請主義」（要請尊重）であり、設問1～4についてはそれに則った講評のアウトラインとしてきた。
- ② 撤退の時期の設定について考慮すべきことは (1) 生存者発見の可能性の評価 (2) 被災国現地政府からの要請内容の確認 (3) 他国援助隊等の対応 (4) 日本チームの事情（隊員の疲労程度や救助資機材の状況等）となる。
- ③ ②において対内的な撤退の時期を設定した上で、対外的にも円満に撤退する意味で相手国に当方の事情を説明しながら納得してもらい最終的に双方の同意の上で「撤退時期」を決定する。

(2) 撤退をするにあたって、どのようなことに留意しますか。

- ④ 撤退に際しては、
  - ・被災国政府（災害対策本部）への活動報告内容の報告
  - ・必要に応じて被災国救助チーム等への業務の引継ぎ
  - ・関係機関へのお礼
  - ・行方不明者の家族及び遺族等への気配り（哀悼の意の表明等）
 等が必要となる。
- ⑤ 尚、撤収時期については、活動に着手すると同時に見極めることが重要であり、この際状況に応じ派遣期間を上回る対応が必要と判断される場合には、2次チームの派遣について事前に本部に通報すべく、団長を通じ日本大使館、JICAと協議を行うことも一考と思われる。

平成4年6月26日

《国際警察緊急援助隊派遣概要》

(フィリピン共和国・7/18(火)～7/26(木)の9日間)

1 地震被害の状況等

- 発生日時等 平成2年7月16日(月)16時28分ころ、フィリピン共和国ルソン島マニラ市北東約90kmガバナッアン南東約10km付近を震源とするM7.7の大地震
- 被害の状況 ゲット州バギオ市を中心に死者1,609名、行方不明者1,307名、負傷者3,204名、学校、ホテル等の家屋倒壊6万3,527棟

2 日本政府の対応

7月17日(火)「第2日目」

- 国際緊急援助隊医療チーム8名及び救助チーム26名の派遣を決定
- 緊急援助物資の供与(1億1,348万円相当)発電機、医薬品など

3 部隊派遣等(活動概要)

7月17日(火)17:05 派遣指示

- 警察庁警備局警備課災害対策官室→当庁(災対課)

7月18日(水)「第3日目」

- 5:00派遣申告「災対課長」(総監・副総監・警備部長は省略)

○同日

- 6:00 本部庁舎出発
- 7:30 成田空港VIPルーム集合-結団式
- 10:00 (第1陣) JL741 10名
- 10:15 (第2陣) PR431 16名

○同日

- 14:25 (第1陣) アキノ(マニラ)空港着
- 14:30 (第2陣) 同上
- 16:35 アキノ空港発(空軍機・民間機) 距離220km
- 17:20 サンフェルナンド空港着
- 20:10 H. ミラモンテ(泊)
- 20:40 就寝

7月19日(木)「第4日目」

- 4:30 起床
- 5:00 朝食
- 5:40 H. ミラモンテ発
- 9:00 先発隊11名サンフェルナント空港発(比軍ヘリにて)  
(第2陣7名は9:40)
- 9:23 バギオ空港着
- 10:30 バギオ市内ハイアット・テラスホテル、バギオ大学  
※ロイヤルインホテルで救助活動開始
- 19:30 捜索救助活動終了(生存者の発見なし)  
※米国の救助チーム14:00ころ撤退
- 22:00 白雲山荘(泊)



7月20日(金)「第5日目」

- 7:00 起 床
- 9:00 サンフェルナント残留組8名バギオ市内入り(先発隊と合流)
- 同時刻 ハイアット・テラスホテルで救助活動開始
- 10:40 ネバダホテルで技術指導、資器材の貸与
- 13:30 最終資器材到着
- 17:40 比国遺体発見
- 19:30 捜索・救助活動終了(生存者の発見なし)
- 22:00 ホテル前空地にて野営テント(泊)

7月21日(土)「第6日目」

- 6:00 起 床
- 7:30 ハイアット・テラスホテル捜索活動開始
- 9:00 セントビンセント教会及び隣接家屋の調査実施
- 14:00 比国側へ救助物資(発電機・緊急医療セット)贈呈
- 19:30 捜索活動終了
- 21:30 野営テント(泊)

7月22日(日)「第7日目」

- 8:00 起 床
- 8:50 捜索活動開始
- 14:00 外国チーム対策会議  
(日本・英国・シンガポール・仏国・加国・米国)
- 15:10 比国5歳女子遺体発見
- 16:48 比国遺体発見
- 17:30 エンリレ国防相、ホテル前にて「救助活動終了宣言」
- 18:00 捜索活動終了  
(日本チームホテル45室中25部屋捜索を実施)  
(18名救助・11名遺体・不明55名と発表あり)
- 22:30 野営テント(泊)

7月23日(月)「第8日目」

- 6:30 起 床
- 7:40 資材撤収
- 13:30 撤退完了
- 14:05 バギオ空港発
- 14:45 白雲山荘(泊)

7月24日(火)「第9日目」

- 6:30 起 床
- 7:55 白雲山荘発
- 9:35 バギオ空港発(空軍機)
- 10:35 アキノ空港着
- 10:45 マニラ市内マングリンホテル着
- 19:00 在比日本大使公邸(大使主催夕食会)
- 21:45 マングリンホテル着(泊)

7月25日(水)「第10日目」

- 6:30 起床
- 12:25 JICA主催慰労会
- 17:10 マラカニアン宮殿「アキノ大統領謁見」
- 18:15 マンダリンホテル(泊)

7月26日(木)「第11日目」

- 6:00 起床
- 8:40 アキノ空港発 NW004  
(お見送り、観光大臣・外務次官・空軍司令官)
- 12:20 成田空港着
- 13:05 空港内「解団式」
- 15:30 警察庁次長「帰国挨拶」
- 15:45 帰 庁
- 16:00 警視總監「帰国挨拶」・警備部長「帰庁申告」
- 16:30 健康診断

7月27日(金)

- 9:45 副總監「帰国報告」
- 13:15 東京都庁2F会議室「都知事帰国報告会」

7月31日(火)

- 11:00 警備部長報告会

8月10日(金)

- 総 監 賞

8月11日(土)

- 比国から荷物到着

8月15日(水)

- 10:00 警備局長賞

9月25日(火)

- 16:00 赤坂御所「天皇陛下に謁謁」

平成3年8月1日(木)

- 18:00 飯倉公館「外務大臣、感謝状」

4 反省教訓

- (1) 装備資器材関係
- (2) 服装等
- (3) 輸送手段
- (4) 通信手段
- (5) 食料等
- (6) その他

## 5 携行装備資器材

別添のとおり

## 6 その他

① 平常の心構え

② 出発前の準備

○携行装備資器材 ○個人装備品 ○発令式（申告）

③ 出発時の手続き

④ 救助活動実施要領

○着手前、具体的活動要領（遺体の処理、風俗、習慣、装備資器材の管理、相互の連携、健康管理、安全の確認、抗議対策）

⑤ 報道対策

⑥ 撤収要領

○撤収の時期、装備資器材の撤収

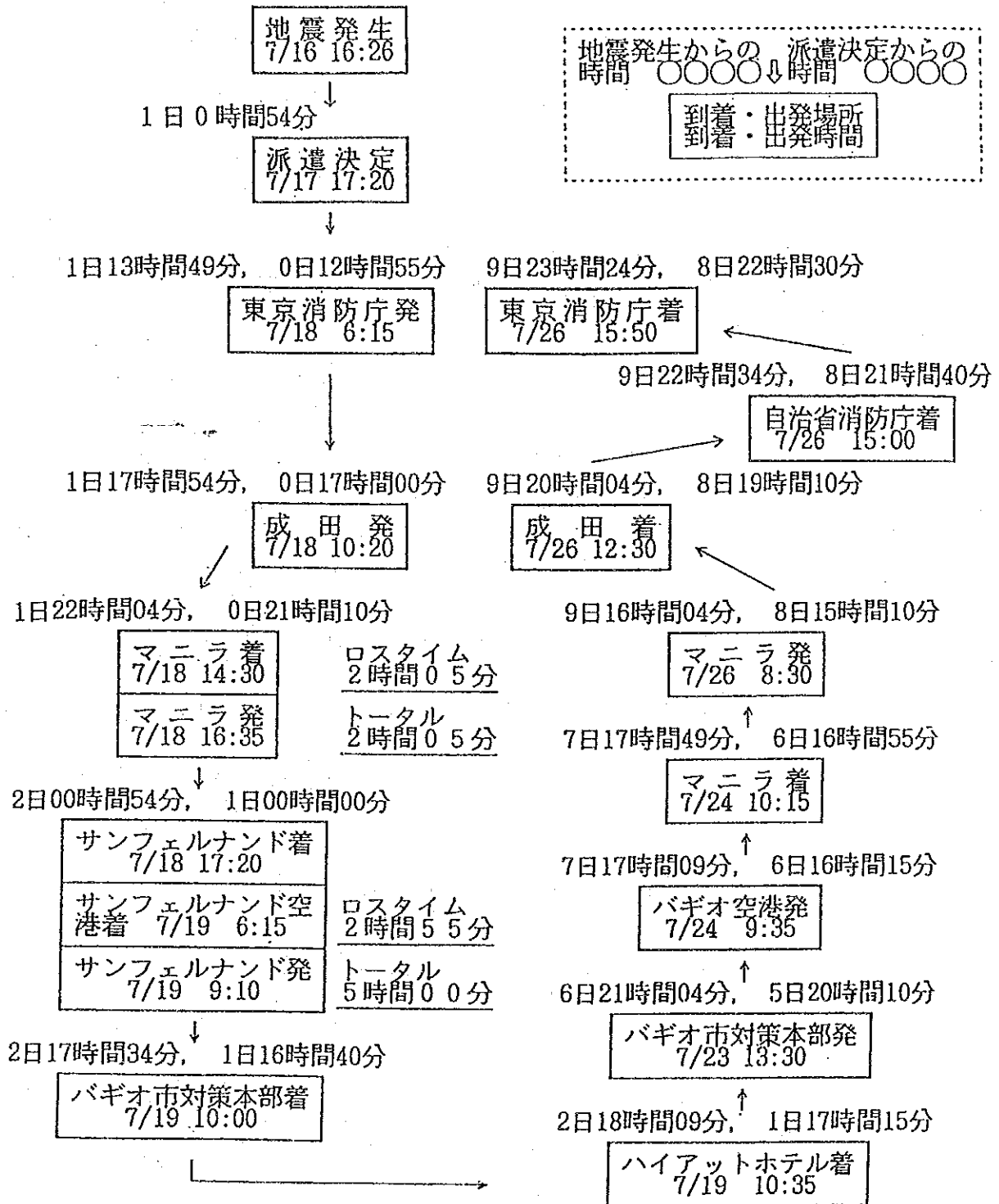
⑦ 帰国後の手続き

⑧ 派遣体験

部隊機行資器材

1.水筒	10	25.単はしご	1
2.防塵メガネ	10	26.機動救助服(一式)	5
3.リュックサック	5	27.日章旗	1
4.革手袋	10	28.携帯メガホン	2
5.防塵マスク	10	29.携帯メガホン予備電池	40
6.ゴム手袋	10	30.レスキューツール	1
7.懐中電灯	10	31.削岩機	1
8.懐中電灯用電池	80	32.エアージッキ	1
9.鉄線はさみ	1	33.救助隊旗	1
10.大ハンマー	1	34.移動式コンプレッサー	1
11.万能ハンマー	1	35.発電機(900W)	1
12.つるはし	2	36.エンジンカッター	1
13.ペンチ	2	37.チルホール	1
14.救助用担架	2	38.エアーソー	2
15.救助用ロープ(100m)...	1	39.ショックパット	4
16.救助用ロープ(50m).....	1	40.投光器セット	1
17.救助用ロープ(30m).....	1	41.ファイバースコープ	1
18.小綱	10	42.地中音響探知器	1
19.カラビナ	60	43.空気ポンベ	6
20.滑車	10	44.スコップ	2
21.写真機	2	45.表張りシート	2
22.ビデオ	1	46.寝袋	8
23.フィルム	30	47.チェーンソー	1
24.カンパン	40	48.烏釜飯	48
		合計 48品目	443点

緊急援助隊行程フロー





国際緊急援助隊（救助チーム）用生活資機材ケース別一覧表

No. 1

ケースNo	梱包状態	品名	ケース別内容	その他	セット数	合計数量			
1	ジュラルミンケース	強力ライト（蛍光灯付き）	各2	単I電池要	3 (A~C)	6			
		キャンドル用ランタン	各2			6			
		補給用キャンドル	各10			30			
		トランジスターラジオ	各1	単III電池要		3			
		3徳スコップ	各1			3			
		乾電池（単I） （単III）	各10 各10			30 30			
		石油コンロ	各1			3			
		ポリタン（手付）（5ℓ用） （10ℓ用）	各2 各2			6 6			
		ビニールバケツ（キャノ付）	各4			12			
		缶切り	各1			3			
		トイレットペーパー（12巻入り）	A、Bに各1			2			
		乾湿温度計	各1			3			
		ボールペン（黒） （赤） （青）	各5 各5 各5			15 15 15			
		マジック（黒） （赤）	各1 各1			3 3			
		アーミーナイフ	各2			6			
		ろ水器（予備カートリッジ付）	各2			6			
		国旗	各1			3			
		アルマイト食器セット	Aに1			1			
		2	ジュラルミンケース	コッヘル		各2		3 (A~C)	6
				フライパン		各1			3
やかん	各1				3				
まな板セット（木製）	各1				3				
アルミカップ（耐熱）	12(A、B)、11(C)				35				
アルマイト食器セット	各3				9				
プラスチックボール	各8				24				
割箸	各1				3				
布たわし	各3				9				
ふきん	各5				15				
中性洗剤	各1				3				
クレンザー	各1				3				
タオル	各5				15				
石鹸	9(A)、6(B、C)				21				
粉石鹸	各2				6				
ほうき	各1				3				

ケースNo	梱包状態	品名	ケース別内容	その他	セット数	合計数量
3		ポリ袋 (大、15枚入り) (中、20枚入り) (小、30枚入り)	23 (A)、22 (B、C) 17 (A、B)、16 (C) 12 (A)、11 (B、C)		3 (A~C)	67 50 34
4	ジュラミンケース	大工セット	1		1	1
		裁縫セット	1			1
		文房具セット	1			1
		マジック (8色入り)	1			1
		ノート	5			5
		レポート用紙	4			4
		用せんバサミ	12			12
		接着剤	5			5
		チョーク (白、6本入り) (赤、6本入り)	2 2			2 2
		タッグタイトル	1			1
		カラーテープ (ビニールテープ、3色)	5			5
		封筒 (大、10枚入り) (中、13枚入り) (小、30枚入り)	10 10 10			10 10 10
		クリップ (ダブルクリップ) (大) (小)	1 1			1 1
		電卓	2			2
		ガムテープ	5			5
		ビニール紐	1			1
		輪ゴム	1			1
		トイレ処理剤	10			10
5	ジュラミンケース	ロープ (長) (短)	2 2		1	2 2
	段ボール	毛布	18、17		2 梱	35



第5回国際緊急援助隊救助チーム資機材習熟訓練プログラム  
10月14日(水)～16日(金)

月日	時 間	プ ロ グ ラ ム	会 場
10 月 14 日  (水)	13:00	国際協力事業団(第8会議室:8階)集合 <受付・研修会費徴収>	JICA: 第8会議室
	13:15	<国際緊急援助局長挨拶> <オブザーバー・事務局紹介> <配布資料説明>	
	14:00-	新宿(三井ビル)発 (移動の車中において自己紹介及びビデオ数種上映)	
	-17:00	鹿沼着	
	17:10-	オリエンテーション 国際協力事業団事業概要説明 国際緊急援助体制概要説明 共通資機材について	A 会 場
	-18:45	熱画像直視装置等使用説明	
	19:00--20:00 20:00-	夕 食 各庁別連絡会	食 堂 A 会 場 他
15 日  (木)	07:30--08:00	朝 食	食 堂
	08:15	集合	ホテル玄関前
	08:30--09:00	習熟訓練方法説明	B 会 場
	09:00--12:00	習熟訓練(グループ別)	〃
	12:00--13:30	昼食、休憩	食 堂
	13:30--16:30	習熟訓練(グループ別)	B 会 場
	16:30--17:30 18:30--21:00	レポート作成 懇親会	A 会 場 ホテル2階
16 日  (金)	08:00--	朝 食	食 堂
	09:00--10:00	総括・閉会	A 会 場
	10:30	鹿沼発	
	13:30	新宿駅西口解散(東京駅経由)	

注) A会場(ホテル京屋内)  
B会場(帝国繊維鹿沼工場内)  
食堂(ホテル京屋内)

第5回国際緊急援助隊救助チームリーダー研修参加者名簿

1. 受講者

No	氏名	所属先		グループ
1	長井 正光	〈警〉	北海道警察本部機動隊	A
2	坂野 吉隆	〃	警視庁災害対策課	A
3	田中 順	〃	警視庁災害対策課	B
4	小山田典明	〃	埼玉県警察本部機動隊	C
5	高橋 秀治	〃	神奈川県警察本部第一機動隊	C
6	井川 直美	〃	愛知県警察本部機動隊	D
7	小林 政綱	〃	大阪府警察本部第一機動隊	D
8	成田 富憲	〃	京都府警察本部機動隊	E
9	藤川 公明	〃	兵庫県警察本部機動隊	E
10	靄 洋一	〃	福岡県警察本部第一機動隊	B
11	前畠 久光	〈海〉	横浜海上保安部巡視船「やしま」	A
12	長谷川義明	〃	横浜海上保安部巡視船「やしま」	B
13	大泉 彰	〃	羽田航空基地	C
14	野間 清隆	〃	羽田特殊救難基地	D
15	佐々木清寿	〃	羽田特殊救難基地	E
16	岩原 秀雄	〃	名古屋海上保安部巡視船「みずほ」	C
17	佐藤 金哉	〃	伊勢航空基地	D
18	藤井 邦彦	〃	広島航空基地	E
19	平井 勝彦	〃	新潟海上保安部巡視船「えちご」	B
20	坂内 真一	〃	新潟海上保安部巡視船「やひこ」	A
21	山崎 英樹	〈消〉	札幌市消防局	A
22	佐々木勝博	〃	仙台市消防局	B
23	秋葉 健次	〃	千葉市消防局	C
24	内山 輝夫	〃	船橋市消防局	D
25	平野 安司	〃	市川市消防局	E
26	上山 健三	〃	川口市消防本部	A
27	渡辺 雅広	〃	松戸市消防局	B
28	繁田 哲司	〃	堺・高石消防組合消防本部	C
29	角石 信宏	〃	牧方・寝屋川消防組合消防本部	D
30	村上 建夫	〃	熊本市消防局	E

## 2. 講師

No	氏名	所属先
31	今川 八束	麻布大学環境保健学部環境環境保健学科
32	山本 保博	日本医科大学付属多摩永山病院救命救急センター
33	永井 康雄	元毎日新聞編集長
34	後藤 昌征	神奈川県警察戸塚警察署
35	山口 美嗣	第三管区海上保安部羽田特殊救難基地
36	大曾根 隆	東京消防庁警防部警防課

## 3. オブザーバー及び事務局

No	氏名	所属先
37	諸澤 憲弘	警察庁警備局警備課
38	上村 正明	警察庁警備局警備課
39	宇出津弘昭	海上保安庁総務部国際課
40	平田 友一	海上保安庁警備救難部救難課
41	山崎 昇	自治省消防庁救急救助課
42	下枝 昌司	自治省消防庁救急救助課
43	亀井 啓次	外務省経済協力局国際緊急援助室
44	小野 睦一	国際協力事業団国際緊急援助隊事務局
45	笥 克彦	国際協力事業団国際緊急援助隊事務局業務課
46	古屋 年章	国際協力事業団国際緊急援助隊事務局業務課
47	奥山 亮子	財) 国際協力サービスセンター開発部開発業務課
48	熊田 恵子	財) 国際協力サービスセンター開発部開発業務課
49	上野 貞信	財) 国際協力サービスセンター開発部開発業務課
52	測上いさ子	財) 国際協力サービスセンター開発部開発業務課

